

ミューズNO. 24 平和のための博物館・市民ネットワーク通信

発行：2010年2月

編集：山辺昌彦、山根和代、安齋育郎

翻訳：森岡純子

イラスト：戸崎恵理子

事務局所在：東京大空襲・戦災資料センター内 山辺昌彦気付

住所：〒136-0073 東京都江東区北砂1-5-4

Tel: 03-5857-5631 Fax: 03-5683-3326

Web: <http://www.tokyo-sensai.net/>

「平和のための博物館・市民ネットワーク」 第9回全国交流会の報告

事務局 山辺昌彦

2009年12月5日(土)午後1時30分～5時50分と6日(日)午前9時30分～午後0時30分の日程で、文京区民センター3階の3-C会議室において「平和のための博物館・市民ネットワーク第9回全国交流会」が開催されました。参加者は34名でした。

1日目は、運営委員の、都立第五福竜丸展示館の安田和也さんと山梨平和ミュージアムの浅川保さんの司会により、33名の参加で開かれました。若い世代による継承のとりくみ、研究・展示など博物館活動の充実、博物館と市民や団体との連携などを中心に特別報告をしていただき、討論しました。まず最初に安田和也さんから、第五福竜丸展示館の実例も交えながら、基調報告がありました。特別報告は、ひめゆり平和祈念資料館の普天間朝佳さんの「ひめゆり平和祈念資料館の次世代継承の取り組み」、東京大空襲・戦災資料センターの山本唯人さんの「体験世代と第2・3世代の記憶継承活動ー東京大空襲・戦災資料センターの研究と活動から」、ピースおおさかの常本一さんの「“公立”平和博物館としてピースおおさかの現況と課題」の3本でした。討論のあと、原爆の凶丸木美術館の岡村幸宣さんから美術館の活動紹介の報告があり

ました。1日目の最後に事務局の山辺が「平和のための博物館・市民ネットワーク」の会計報告と事業報告をしました。1日目終了後懇親会を開催しました。

2日目は、運営委員の、アクティブ・ミュージアム女たちの戦争と平和資料館の池田恵理子さん、東京大空襲・戦災資料センターの梶慶一郎さんの司会により、23名の参加で開かれました。愛知教育大学の南守夫さんの「自衛隊史料館等における南京事件と重慶爆撃の展示について」、山辺昌彦の「2008年・2009年における『平和のための博物館』での戦争関係展示会などの紹介」、草の家の山根和代さんの「平和マップの紹介」、平和博物館研究会の福島在行さんの「日本平和学会研究大会の紹介」、鳥井真木さんの「立命館大学国際平和ミュージアムと日本平和博物館会議の紹介」、池田恵理子さんの「女たちの戦争と平和資料館の、中国・山西省・武郷県の八路軍太行紀念館での日本軍性暴力パネル展開催などの紹介」、渡辺総子さんの「わだつみのこえ記念館の紹介」、宮原大輔さんの「戦争と平和の資料館ピースあいちの3年目の事業紹介」、浅川保さんの「山梨平和ミュージアム2周年の事業紹介」、米田佐代子さんの「らいてうの家の活動紹介」の各報告がありました。

「平和のための博物館国際ネットワーク」統括コーディネータのピーター・ヴァン・デン・

デュンゲンさんから「平和のための博物館・市民ネットワーク交流会」へのメッセージを寄せていただきました。

報告と第1日目の討論の内容は別に要旨を載せましたのでご覧ください。



erico

参加者有志は5日午前と6日交流会終了後に、「わだつみのこえ記念館」などの見学をしました。

報告者・司会者以外に、太平洋戦史館の花岡千賀子さん、アウシュビッツ平和博物館の小淵真理さんと塚田一敏さん、原爆の図丸木美術館の小寺隆幸さんと鶴田雅英さん、女たちの戦争と平和資料館の渡辺美奈さん、東京大空襲・戦災資料センターとわだつみのこえ記念館の石橋星志さん、政治経済研究所の北村浩さん、東京都平和祈念館(仮称)建設を進める会の柴田桂馬さん、立命館大学国際平和ミュージアムの高杉巴彦さん、ひめゆり平和祈念資料館の仲田晃子さん、大東文化大学の杉田明宏さん、早稲田大学大学院の栗山究さん、京都大学大学院の福西加代子さん、京都橋大学大学院の日高昭子さん、猫座の大久保昌一良さんと福井淑江さん、NHK首都圏放送センターの佐伯敏さんが参加されました。

「平和のための博物館・市民ネットワーク」会計報告

(2008年10月～2009年11月)

収支報告

収入	
会費	1 6 5 0 0 0円
カンパ	1 0 0 0 0 0円
繰越	1 0 3 1 2 1円
計	2 7 8 1 2 1円

支出	
送料	1 2 1 1 9 0円
印刷費	3 0 8 3 4円
封筒代	2 5 0 0円
会場費	8 4 0 0円
繰越	1 1 5 1 9 7円
計	2 7 8 1 2 1円

内訳		
会費		
06年度	2人	4 0 0 0円
07年度	4人	8 0 0 0円
08年度	27人	5 4 0 0円
09年度	42.5人	8 5 0 0円
10年度	3人	6 0 0 0円
11年度	2人	4 0 0 0円
12年度	1人	2 0 0 0円
13年度	1人	2 0 0 0円
計	82.5人	1 6 5 0 0 0円

送料	
日文22号	1 6 1 4 0円
英文20号	4 5 5 3 0円
日文23号	1 7 5 1 0円
英文21号	4 2 0 1 0円
計	1 2 1 1 9 0円

印刷費	
日文22号	7 4 7 8円
英文20号	8 6 4 8円
日文23号	5 8 2 0円
英文21号	8 8 8 8円
計	3 0 8 3 4円

繰越	
郵便振替	9 5 0 3 0円
現金	2 0 1 6 7円
計	1 1 5 1 9 7円

個人会員	84人
2014年まで納付	1人
2013年まで納付	1人
2011年まで納付	1人
2010年まで納付	4人
2009年まで納付	45人
2008年まで納付	20人
2007年まで納付	5人
2006年まで納付	5人
2005年まで納付	2人

入会	6人
退会	6人

●事業報告
ニュースの発行
日文22号

2008年 12月

英文 20 号	2009年 1月
日文 23 号	2009年 8月
英文 21 号	2009年 10月

第9回全国交流会の開催 2009年12月5
～6日

●事業予定

ニュースの編集・発行
日文2回・英文2回

第10回全国交流会
2010年12月4日・5日に山梨平和ミュー
ジウムで開催

『世界における平和のための博物館』の日本語
版刊行

事務局は引き続き、「東京大空襲・戦災資料セ
ンター内山辺昌彦気付」です。

運営委員は池田恵理子・梶慶一郎・山辺昌彦・
安田和也・浅川保・宮原大輔さんです。

ニュースの編集委員は山根和代・山辺昌彦・
安斎育郎さんです。

平和のための博物館市民ネットワーク 交流会へのメッセージ

平和のための博物館国際ネットワーク
統括コーディネータ

ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士

親愛なる友人の皆様

本日及び明日開催される交流会へ、このメッ
セージをお送りできることを嬉しく思います。

数日後の木曜日にバラック・オバマ大統領は、
オスロでノーベル平和賞を受賞されます。10月
に彼のノーベル平和賞受賞の発表後、オハイオ
州のデイトン国際平和博物館のボランティアの
方や支持者は、彼がノーベル平和賞の賞金の一
部を博物館へ寄付することを願って手紙を書く
ことにしました。11月18日博物館は、正式な
手紙を大統領に送った時に記者会見をおこない
ました。

もしこの新しいノーベル平和賞受賞者がこの
申し出に前向きに応えるならば、デイトン博物
館、そしてあらゆる平和博物館にとって素晴ら
しい後援となることでしょう。同時に世界のメ
ディアはその（小さな）博物館を多くの人びと
に紹介し、「平和博物館における平和教育の努力

は極めて重要であるが、しかし財政的支援が必
要である」という大きなメッセージを伝えたの
です。

皆さんの中で多くの方がたにとってこのよう
な状況は、ありふれたことでしょう。少なから
ぬ平和のための博物館が一人あるいは個人から
なる小さい団体の発案で作られています。その
人びとの構想、推進力、決意によって、夢が実
現されてきました。平和のための博物館の多く
が、ボランティアの非常に貴重な活動、そして
その友人や後援者による小額でも極めて重要な
寄付金によって維持されています。

市民ネットワークに関わっている博物館は内
容が大変多様であり、様々な貴重な展示、活動、
教育的な取り組みがおこなわれています。皆さ
んの博物館は「平和の文化の発展」という表現
に意味と内容を与え、世界を全ての人びとにと
ってより幸福な場にするのに何が成されてきた
のか、また何をすべきなのかを示しています。
皆さんの博物館では訪問者を啓発し、鼓舞し、
そして励まし、このようにして本当に極めて貴
重な教育的体験を提供されているのです。

何年もの間私はここに集まっていらっしゃる
方がたの博物館を、幸いなことに訪問しました。
そこでは素晴らしい、そして時には心から感動
的な展示物を見ましたし、博物館のスタッフや
ボランティアの方がたの献身的努力に触れ、忘
れることができない印象を持ちました。数例だ
け述べることをお許し下さい。

東京にある第五福竜丸展示館、東京大空襲・
戦災資料センター、女たちの戦争と平和資料館、
埼玉の丸木美術館は、取り組んでいる問題は
大変異なっていますが、暴力と戦争のない世界と
いう未来像は同じである素晴らしい創造物です。
沖縄ではひめゆり平和祈念資料館（現在日本平
和博物館会議の新会員として20周年を祝って
います）と佐喜真美術館を訪問して、感動しま
した。私はまた朝鮮人と中国人が強制労働させ
られ、長崎へ投下された原爆の忘れられた被爆
者の運命を気遣った偉大な平和主義者を記念し
た岡まさはる記念長崎平和資料館も、大変尊敬
しています。とても異なった平和資料館として
高知市に「草の家」がありますが、その創設者

で感動的な平和教育者であった故西森茂夫氏に会うことができ幸いでした。

また長年に渡ってたゆみなく日本語と英文の「ミューズ」の編集をされた山辺昌彦氏、山根和代博士、安齋育郎教授、翻訳者の皆さんにご挨拶ができ嬉しく思います。英文の Muse によって世界中の平和博物館の友人の皆さんが、世界で平和博物館運動について語ることが可能な唯一の国である日本におけるたくさんの新事実を知ることができています。

平和のための博物館国際ネットワークを代表して、皆様が関わっていらっしゃる素晴らしい平和のための活動に対して心より感謝の気持ちを表し、実り多い再会となりますことを願っています。

第1日目の討論要旨

安田和也（公益財団法人第五福竜丸平和協会事務局長、展示館学芸員）

今年の交流会では、初めて以下の3点の「討論のテーマ」を設定しました。

- ①平和博物館で伝える一体験をどのように継承するか
- ②平和博物館での研究活動とその継続
- ③平和博物館の現況を考える、です。

最初に第五福竜丸展示館の安田より、テーマについて展示館での活動を敷衍しての基調報告をおこない、それぞれのテーマについての報告を①についてはひめゆり平和祈念資料館の普天間朝佳さん、②については東京大空襲・戦災資料センターの山本唯人さん、③についてはピースおおさかの常本一さんがおこないました。

報告につづいて質疑・討論をおこない、活発な論議となりました。

まず、直接の体験者が高齢化あるいは亡くなるもとの「体験継承」のとりくみは、共通の課題としても関心の高いものでした。「ひめゆり」のとりくみは2002年より次世代プロジェクト

トを立ち上げての持続的・総合的なとりくみに注目があつまりました。「ひめゆり」の規模の大きさなどからどこの館でもすぐに導入できるものではないにしても示唆に富んだ報告でした。

「戦災資料センター」は、政治経済研究所の附属施設としての開館の経緯にもみられるように多数の研究者が参画しています。2006年には「戦争災害研究室」が設置され、定期的な研究誌の発行、文科省の科研費助成による諸活動など活発です。

報告では、体験世代から非体験世代への語り継ぎのとりくみが、特に若い世代との協同活動の具体的な報告とともに興味深く、参加者からも意見が多くいただきました。

「ピースおおさか」からは、公立博物館の現況についてとりわけ自治体の財政難を理由にした経費削減問題や加害の展示にたいする組織的な攻撃とその影響などについて報告されました。市民ネット交流会の参加者は現在は民間施設関係者が大半となっていますが、平和博物館のありかた、とりわけ国公立館の展示とその方向性は、持続して注視していくべきでしょう。

ひめゆり平和祈念資料館の次世代継承の取り組み

ひめゆり平和祈念資料館学芸員 普天間朝佳

ひめゆり学徒生存者たちとひめゆり同窓会が「二度とあのような戦争を起こさないために、自分たちが体験した戦争の実相をきちんと伝えたい」と、1989年6月23日に開館したひめゆり平和祈念資料館は今年の6月で満20周年を迎えました。

ひめゆり資料館の理念は、生存者たちが資料館づくりの過程の中で、長い時間をかけて議論した結果、「教育の恐ろしさを忘れない」「体験した戦争の恐ろしさを語り継ぐ」「平和であることの大切さを訴え続ける」「亡くなった学友・教

師の鎮魂」ということになりました。

開館以来、ひめゆり学徒生存者たちは資料館運営の軸となってきましたが、戦争体験の継承ということが社会的に大きな課題となってきた戦後55年ごろから、ひめゆり資料館でも、次世代への継承をどうしていくかが課題となってきました。そして「次世代プロジェクト」という名称をつけて、次世代への継承の準備を始めようということになったのです。

まず、最初に出てきたアイデアは、生存者たちの証言を映像に撮って、展示室で流せば、体験が継承できるのではないかということでした（㊦体験者の証言映像の記録化）。しかし、その後議論を進めていくうちに、「展示室で証言映像を流すだけでは事足りないのではないか」「展示そのものも次世代向けに変えていく必要があるのではないか」という意見が出て、展示リニューアルに取り組むことになりました（㊦展示リニューアル）。

展示リニューアルで何が変わったのかというと、①それまでに比べて解説文やキャプション、グラフィックが増加したこと、②展示に体験者の証言映像を取り入れたこと、③平和への思いを未来につなげたいということで平和への広場を設置したこと、④詳細な英語訳をつけたことの4点でした。

リニューアルで目指したのは、それまで館内説明に当たっていた体験者がいなくてもひめゆりの戦争体験を理解することができる展示、そして今の中高生が自分たちの問題として受け止めることができきような展示でした。

リニューアルの方法を議論しているころ、「生存者がやっている証言員の仕事を引き継ぐ次世代の後継者が必要ではないか」という意見が出て、その役割を担う職員としての「説明員」を1995年に採用することになりました。現在は3名の説明員がいます（㊦後継者の育成）。

現在取り組んでいる次世代継承事業は、生存者と次世代職員が戦跡を回って体験を聞き取っ

ていくという「証言員一人ひとりの戦跡めぐり」や戦争体験だけでなく戦前や戦後の体験も聞き取っていくという「証言員一人ひとりの戦前・戦後の聞き取り」です。来年の4月から予定している「県外巡回展」も次世代継承の重要な試みと考えています。

次世代への継承にとって大事なものは、言うまでもなく「後継者の育成」だと思いますが、その場合、重要になってくるのが、受け継ぎごとする者たちの目的の共有だと思います。「ひめゆりの戦争体験・平和への思い」を受け継ぎ、それを伝えていくことが、とても大切なことであるという目的の共有です（㊦後継者の目的の共有）。

そして、やはり、その活動の拠点である組織がしっかりしていなくてはダメだと思います。ひめゆり資料館は、生存者にとっても、そして次世代職員にとっても、大事な活動の拠点となってきました。その資料館を受け継ぎ維持していくということは、とても大事なことだと考えています（㊦活動の拠点としての資料館の継承）。

最後に大事なことは、資料館運営の在り方だと思います。生存者たちは幾多の難関を乗り越え資料館をつくり、そして20年間運営を続けてきました。その中で一番大事だったのが、彼女たちのチームワークだと思います（㊦チームワーク）。そしてチームワークを支えるのが民主的な運営方法だと思います（㊦民主的運営）。

彼女たちのチームワークを支えているのは、もちろん戦争体験を共有しているということもありますが、もっと大きいのが、彼女たちのこの25年間の、資料館づくりや資料館の運営で得た経験の共有だと思います。

私たち次世代職員には、戦争体験もありませんし、資料館づくりの共有経験もありません。しかし、「戦争体験を次世代に継承していくことは大事である」という目的を共有しています。この目的を共有し続け、また民主的な方法で資料館を運営し続け、その共有経験を積み重ねて

いけば、きっと継承は可能ではないかと信じています（5次世代の資料館運営の経験の共有）。

館長の本村つるが今年のプレスのインタビューで、「私たちは、この若い人たちに私たちのすべてを託したいと思っている。だから、若い人たちは私たちからどんどん話を聞いて、どんどん吸収して、受け継いでほしい」と話していました。私たち次世代は、今、彼女たちと共有できている時間を奇跡のように、貴重なものだと思っていますし、大切にしていきたいと考えています。また、私たちが得た、この貴重な体験を、ほかの次世代の人たちとも、ぜひ共有していきたいと考えています。

体験世代と第2・3世代の記憶継承活動

—東京大空襲・戦災資料センターの研究と活動から

東京大空襲・戦災資料センター 研究員 山本唯人

近年、戦災資料センターでは、戦争体験のある世代とない世代が共同して、さらに後の世代や社会に向けて戦争体験や記憶を伝える機会が増えてきた。今、このような活動に参加する若い世代は、親もしくは祖父母が戦争体験を持つ世代であるが、ほぼ3世代（体験者本人から見た孫の世代）までが直接体験を伝えられる限界とすれば、この世代の若者たちに、体験・記憶をしっかりと伝え、若者たち自身がさらに後の世代や社会に向けて伝える力を培うことは、体験・記憶の継承活動にとって大切な意味を持つはずである。

報告では、第1に、このような視点から、体験者の子ども世代（第2世代）と孫世代（第3世代）を今後の記憶継承活動にとって鍵になる世代という意味で「第2・3世代」と呼び、体験世代と第2・3世代が《共同》することから、どのような活動を作っていけるのか、そのために、平和博物館は何ができるのかを、戦災資料センターの実践（VOICE—知らない世代からのメッセージ展、2007年12月6日～2008年1月14日開催など、詳しくは小森陽一監修『戦争への想像力』新日本出版社所収の拙論参照）を紹介しつ

つ考察した。

第2に、資料センターでの実践の意義を考える前提として、資料センターの前身である「東京空襲を記録する会」が1970年に発足してから東京都平和祈念館の建設「凍結」問題を経て、2002年の設立にいたる歴史、現在資料センターが展開している活動の広がり、運営体制の概要などを紹介した。戦災資料センターは、発足の際、(財)政治経済研究所の附属施設となったことから研究機関としての資格を合わせ持ち、そのことが、展示や記憶継承を進める上での基礎研究を支える役割を果たしている。設立から8年を経過し、来年度から財政基盤の確立について本格的な議論をはじめることになっている。

最後に、今後への課題として、①実践事例に基づく課題の洗い出し、②専門性を持ったコーディネーターの育成、③活動資源の地域格差の是正を挙げた。その前提となるのは、多様な現場、多様な体験をテーマとする博物館のどれもが生き生きと活動し、相互につながることで初めて「戦争」の全体像についての理解が深まり、個別の活動も発展するという《相互性》の観点である。個別の事例を出し合いながら、「共同で取り組むべきこと」「社会制度の支援を求めべきこと」などを洗い出すことも今後の課題となるだろう。

自衛隊史料館等における南京事件と重慶爆撃の展示について

南 守夫（愛知教育大学）

平和博物館を戦争博物館（戦争肯定の思想に基づく戦争関係博物館）との対抗関係の中に位置づけることが重要である。日本では1990年代以降、戦争博物館の復活及び新設が進行し、入館者数等の点で平和博物館との拮抗状況が生まれている。比較的規模の大きな各十余りの平和博物館と戦争博物館を対象とした調査は最近3年間（2006～2008年度）の入館者数が双方とも300万～400万人の間で拡大拮抗の傾向を示した。その中で、靖国神社遊就館及び各県等護国神社関係史料館等群、大和ミュージアム等の公立戦

争博物館群と並んで戦争博物館の一つの柱として重要なものに自衛隊関係史料館・広報館等群がある。成立時期によって、戦前型（江田島・教育参考館等）、1950年代～80年代成立の旧型、1990年代以降の新型に分類できるが、今回は旧型の史料館等を取り上げ、展示内容の問題点として、日本軍の戦争犯罪の無視又は隠蔽、作戦への無批判、日本軍戦没将兵の無批判な賛美、日本が行った戦争の侵略性の無視の四点を指摘し、特に南京大虐殺と重慶無差別爆撃に関する歴史の展示の有無及び問題点についていくつかの自衛隊史料館等（福知山駐屯地史料館、久居駐屯地資料館、宇都宮駐屯地防衛資料館、浜松基地資料館及び「陸軍爆撃隊発祥之地」碑、等）の展示を検証し、旧日本軍の残虐行為や戦争犯罪が意図的に無視・隠蔽されている実態を指摘した。そして、政府の公式見解（「村山談話」）に反する歴史展示が国費で維持・管理されていることの問題性を提起した。

2008年・2009年における「平和のための博物館」での戦争関係展示会などの紹介

山辺昌彦

2007年の第7回交流会以降の「平和のための博物館」での戦争関係展示会などの取り組み状況を紹介します。今年の8月1日に水戸市平和資料館が開館しました。長い設置要求運動が実った成果です。このほか、前の時期の2006年になりますが、佐世保空襲資料室と枚方市平和資料室が開館しており、最近知ったのであわせて紹介します。この間、公立の平和博物館で、市民団体が運営や企画展の準備などに係わることが多くなっています。この間での「平和のための博物館」にとつての最大の問題は、大阪や栗東歴史民俗博物館に厳しく表れたように、財政難を理由とする経費削減で博物館の運営が困難になっていることです。その中で平和の取り組みを続ける努力がなされています。平和をめざしての、戦争関係の展示会を継続開催する努力が、多くの歴史博物館でなされています。桜ヶ

丘ミュージアムのように集大成した特別展を開催したところでも、その後も継続して開いているところもあります。箕面市立郷土資料館のように一時中断しても、その後再び継続的に開催しているところもあります。また、私は知らなかったのですが、釜石市郷土資料館、歴史館いずみさの、多度津町立資料館、大牟田市立三池カルタ・歴史資料館、久米島自然文化センターなどでも継続的な取り組みがなされていました。この間新たに戦争関係の特別展を開催したところもありました。その中でも大津市歴史博物館や愛媛県歴史文化博物館は規模が大きく充実したものでした。戦後何十年という節目ではありませんでしたが、仙台市歴史民俗資料館、水戸市立博物館、和歌山市立博物館などで久しぶりに充実した戦争や戦後復興関係の特別展が開催されました。取り組みのテーマとしては、戦争遺跡関係が引き続き多くなっています。展示会は福山市人権平和資料館、岐阜市平和資料室、ピースあいち、名古屋市見晴台考古資料館、府中市郷土の森博物館、武蔵村山市立歴史民俗資料館、東大和市立郷土資料館などで開かれ、地図・案内書は仙台市歴史民俗資料館、岐阜市平和資料室、福山市人権平和資料館などで発行され、沼津市明治史料館では子ども対象とする遺跡めぐりが開かれています。また、戦争の記憶をテーマとする展示会も、すみだ郷土文化館、石川県立歴史博物館、米子市立山陰歴史館などで開催されました。

日本平和博物館会議の紹介

立命館大学国際平和ミュージアム、
教育文化事業課鳥井真木

第16回日本平和博物館会議が、2009年11月11日～12日、おおさか国際平和センター（ピースおおさか）で開催されました。来賓として大阪府人権室、大阪市教育委員会からのご挨拶があり、「平和のための博物館国際ネットワーク」統括コーディネータであるピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士から第16回日本平和博物館会議に寄せられたメッセージが紹介されました。

今回、協議事項として新たに対馬丸記念館（那覇市 2004年開館）の加盟の件が審議され、承

認されました。現在、平和博物館10館が「日本平和博物館会議」を結成しています。沖縄県平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館、対馬丸記念館、長崎原爆資料館、広島平和記念資料館、大阪国際平和センター（ピースおおさか）、立命館大学国際平和ミュージアム、地球市民かながわプラザ、川崎市平和館、埼玉県平和資料館の10館で、来館者数は年間400万人に達します。これらの館は過去の戦争の被害や加害の問題に加えて、貧困や差別や環境問題など、能力の開花を妨げているさまざまな社会的暴力の克服のために、実物資料や写真や解説パネルを展示し、来館者に平和創造のための努力への参加を呼びかけています。

同会議の場では各館の活動取り組みの状況が報告され、共同して「日本平和博物館会議」の活動を広く広報していくための方策として、ロゴマークの作成と各館で加盟館利用可能な巡回用の展示資料のデータベース作成についての取り組みを進めていくこととなりました。立命館大学国際平和ミュージアムは、それらの活動の取りまとめに積極的に貢献することを期待されています。また、日本平和博物館会議は、加盟各館の運営上の問題や課題を事前に聴取事項として集約し、その問題の解決にあたり情報を共有する取り組みにも引き続き取り組みます。

会議終了後、ピースおおさかの施設見学、翌12日はミニフィールドワーク「大阪城周辺の戦跡を歩く」が開催され、その後大阪歴史博物館の施設見学が行われました。

第17回日本平和博物館会議（2010年11月予定）は、地球市民かながわプラザ（横浜市）で開催されます。

第16回日本平和博物館会議で、採択された核廃絶のための共同アピールを紹介し、同会議が共同アピールを出すのは史上初めてです。

世界平和記念日にあたり 共同アピール

今、世界には平和への変化の兆しがあらわれている。

21世紀に入ってもなお、核兵器が存在し続け、紛争、差別、貧困、生態系の危機など、様々なかたちをした暴力という暗雲に包まれていた世

界に、一筋の光が差し込むようになった。その光をもたらしたものこそ、2009（平成21）年4月5日、チェコのプラハで行われた、オバマ米大統領の演説である。大統領は「核兵器のない世界」は実現可能であると高らかにうたい、とりわけ、「核兵器を使用した唯一の核保有国として、米国には行動すべき道義的責任がある」との言葉は、我々、被爆国の国民を勇気づけ、その核廃絶への信念を改めて確かなものとした。プラハでの核廃絶演説後の9月、国連安全保障理事会は「核兵器のない世界の条件を構築すること」を全会一致で決議した。しかしながら、その道が険しいこともまた忘れてはならない。我々、第16回日本平和博物館会議参加メンバーは、オバマ米大統領のプラハでの演説に敬意を表するとともに、核廃絶・恒久平和に向けた取り組みに一層邁進することをここに誓い、共同のアピールとする。

2009（平成21）年11月11日

（世界平和記念日）

第16回日本平和博物館会議

丸木美術館：埼玉・東松山市

原爆の図丸木美術館学芸員 岡村 幸宣

2009年8月6日の「ひろしま忌」は、300人近くの方が参加して行われました。ジェンダー研究家の加納実紀代氏が「私の原爆の図」と題する講演を行い、「侵略戦争は民衆が加害と被害の二重性を背負わされる」「近代文明の効率第一主義の究極である核に対立するのは“弱者の思想”である」と語りました。夕方には美術館となりの都幾川にとうろうを流し、被爆者への祈りを捧げました。

今年で5回目を迎えた「今日の反核反戦展2009」が2009年9月12日～10月17日の会期で開催されました。出品作家は87名。絵画や写真、彫刻、立体造形など多様な表現から、戦争や核問題に向き合う鋭い問題提起が浮かび上がりました。オバマ米大統領の核廃絶発言や日本の政権交代などの影響も受け、多くのメディアの注目も集めました。

2009年10月24日から12月12日までは「中村正義展—美の秩序に挑んだ画家—」が開催さ

れました。中村正義は36歳の若さで日展の審査員に選ばれながら、伝統的な秩序に疑問を抱いて日展を脱退し、独自の表現世界を模索した画家です。日展に対抗するため新たな団体を立ち上げ、水俣病を題材にして現代文明への継承を鳴らす作品を描くなど、時代と鋭く切り結んだ活動も行いました。

会期中の10月31日には映画監督・プロデューサーの武重邦夫氏が「中村正義と映画」と題し、1965年の映画『怪談』（小林正樹監督）の「耳なし芳一」に使われた中村正義の代表作《源平海戦絵巻》の映像を用いながら、中村正義と映画の関わりを紹介しました。また、11月7日には川島宏知氏の一人芝居「天の魚（てんのいお）」が上演されました。この芝居は、石牟礼道子氏の『苦海浄土』を原作に、故・砂田明氏が作り上げたものです。美術館のとなりに建つ江戸時代の古民家に設置された舞台は、水俣の漁師の一人語りにもふさわしく、観客は引き込まれるようにして耳を傾けていました。

2009年11月28日・29日には、友の会会員を中心に23名が参加した「足尾鉍毒事件と田中正造ゆかりの地を歩く」見学ツアーを行いました。2010年3月までに完全撤去されるという足尾製錬所跡を訪れ、鉍山で犠牲になった中国人や朝鮮人の慰霊・追悼碑を巡るなど、とても有意義な体験となりました。

2009年12月19日から2010年4月10日までには「没後10年丸木俊展」が行われています。2000年1月13日に87歳で亡くなった油彩画家・丸木俊の生涯の画業を、油彩・水彩・絵本原画など約120点の作品から振り返る企画展です。俊が美術学校を出たばかりで小学校の教員をしていた頃の油彩画も初公開され、ひとりの「女絵かき」としての足どりをたどることのできる貴重な機会となっています。

Tel:0493-22-3266 Fax:0493-24-8371
<http://www.aya.or.jp/~marukimsn/top/kikaku.htm>

アケイブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」
(w a m) - 中国山西省での日本軍性暴力パネル展

w a m運営委員長 池田恵理子

2008年のwamの活動の中心は7月からの第7回特別展「証言と沈黙～加害に向き合う元兵士たち」展でしたが、大きな二つの事業も実現しました。日本語と韓国語でのweb版・最新の慰安所マップの完成（まもなく公表）と、中国山西省・武郷の八路軍太行紀念館での「日本軍性暴力パネル展」の開催です。パネル展はwamの中国展との同時開催には間に合わなかったものの、11月2日、山西省孟県の被害女性とその家族や遺族、山西省・長治市・八路軍紀念館の関係者、日本の武郷展実行委員会のメンバーが集まって開幕式を開きました。広大な展示会場の壁を埋めた166枚の大きなパネルは壮観です。これらはwamの中国展と女性国際戦犯法廷展をベースにした中国語版で、山西省、南京、海南島の性暴力被害者を支援する団体とwamが2年間をかけた共同作業で作成しました。中国の国立の博物館で、日本の市民団体が制作したパネルが1年間も展示されるのは初めてのことでしょう。被害女性と家族の人たちが感動して、食い入るようにパネルに見入っていた姿に心を打たれました。2010年の春にはパネル展の視察ツアーも計画しています。ご注目ください。

第五福竜丸展示館のとりくみから

安田和也（公益財団法人第五福竜丸平和協会事務局長、展示館学芸員）

東京都から管理運営を委託されている（財）第五福竜丸平和協会は、11月2日より「公益財団法人」となりました。新たな気持ちで、原水爆の被害、第五福竜丸の保存、冷戦下の核被害や今日の核問題などの資料収集、教育普及に力をいれ、展示館への来館者を増やしていきたいと考えています。

2009年はビキニ水爆実験被災55年でしたが、2010年の広島・長崎被爆65年にかけて、「核なき地球へのメッセージ」と題してイラストレーター・デザイナーの黒田征太郎さんの作品、ビキニ、フクリュウマル、ピカドン、ヒロシマ・ナガサキ議定書の絵の展覧会を開催しています（3月22日まで）。これとあわせて、3・1ビキニ祈念の市民講座は、3月6日（土）午後1時に明治学院大学国際会議場にて「核兵器のない世界をつくらう」と題して、広島平和文化センタ

一理事長のスティーブ・リーパーさんの講演とともに日米韓中のコメンテーターも交えての論議をおこないます。

5月9日夕刻には、林光さんの作品「原爆小景」を中心にした被爆65年記念コンサートを、被爆者をむかえて催します。第五福竜丸のパネル展も各地での開催をよびかけています。

わだつみのこえ記念館：東京

常務理事 渡辺総子

アジア・太平洋戦争で戦没した学生たちの遺した手紙・日記・遺書・遺影などを展示する当館の開館以来3年間の主活動は、ふだんの常設展示と、夏の館外での特別企画展示「平和のための戦没学生遺稿・遺品展」である。後者は、8月15日の敗戦記念日前後3日～4日間を、江戸東京博物館のホールと付随する広いロビーを使って、遺稿・遺品とともに、当館所蔵の元朝鮮人学徒兵の遺影・諸資料、生みの親である日本戦没学生記念会（わだつみ会）の60年のあゆみ史料、日本戦没学生遺稿集『きけ わだつみのこえ』の諸版、また他の史料館や記念館（今年は戦没画学生慰霊記念館「無言館」）の遺稿・遺作品も展示してきた。NHKやTBSラジオが取り上げてくれることも大きいですが、われわれもハガキ500枚、ホームページ、チラシなどで懸命に呼びかけをしてきた成果であろう、毎回3千余名の来場者があり、たくさんの感想文も寄せられる。戦争を体験した世代からは自らの体験を省みながら、戦争を知らない世代からも、ナマの手紙・日記に触発されて、「二度と戦争を起こしてはいけない。このような催しは今後も続けてほしい」という、決意とわれわれへの期待が書かれていて励まされる。

また2年前には、所在する文京区の財団法人文京アカデミーが運営する「文京ミュージズネット」への加盟が認められ、34館のミュージズマップと情報紙「SQUER」に毎月の展示内容などが紹介されるので、地域住民の方々の来館が少しずつ増えている。1年に1回の合同イベント「ミュージズフェスタ」には、今年も遺稿やパネルを出展し、その際には、スポーツ、美術、史跡、庭園、博物館など、さまざまな分野の出展館の若い担当者との交流もある。これまでの来館者

は、戦争体験者や反戦平和を志向・行動してきた方々が多かったが、この機会を活かし、地域の人々と交流して不戦・平和の活動を広めたい。年2回のフォーラムと講演会をわだつみ会と共催し、戦争体験者の出前講演にも応じている。「記念館だより」は年に1回。せめて2回に増やしたい。月水金の午後のみ開館だが、団体には曜日・時間を問わず要望に応えているので相談してほしい。

TEL・FAX 03-3815-8571

e-mail : info@wadatsuminokoe.org

http://www.wadatsuminokoe.org/

山梨平和ミュージアム（YPM）2周年にあたって

YPM理事長 浅川 保

民立民営のYPMが山梨県甲府市に開館してから2年余が過ぎた。この間の取り組みを振り返り、今後の課題を考えたい。

まず、1階の「戦争と平和」の展示だが、開館時の企画展、「甲府空襲の実相」、その後の企画展「甲府連隊の軌跡」、「戦時下の暮らし」を経て、現在では、小規模ながら全体として、地域から世界の戦争と平和を総合的に考える展示になってきている。2階は、山梨出身で民権・平和・自由主義を貫いた石橋湛山の生涯と思想の展示で、全国初の石橋湛山記念館として、県外からの見学、問い合わせも増えている。10月には、松尾尊兌京都大名誉教授らを講師に生誕125年記念シンポジウムを開催した。

戦争体験の継承・平和の取り組みを交流するために毎月の企画行事にも取り組み、行事を通しての新たな発見・出会い・つながりが広がっている。内外の平和博物館との交流としては、昨年は立命館大の安斎育郎氏、今年は東京大空襲・戦災資料センター戦災資料センターの早乙女勝元氏を招いたり、昨秋の国際平和博物館会議に5名参加するなど力を入れている。小・中・高・大学生など若者の見学も増えているが、まだまだ少ない。若者の見学・参加をどう広げることが課題である。

「平和・協同・自然のひろば らいてうの家」 にどうぞ

らいてうの家館長 米田佐代子

どうして「らいてうの家」が「平和のための博物館」交流会に出席？と不思議に思われるかもしれませんが、今回はわたしが個人参加しました。でも、信州の山林に「元始女性は太陽であった」で知られる平塚らいてうの記念施設を建てて4年、気がついたら「戦争体験を語る会」や『軍隊を捨てた国コスタリカ』の映画会、「らいてうの平和思想」「核なき世界をねがった湯川秀樹」の講座などをするようになり、企画展示では「女たちの平和のメッセージ」特集もしました。「これって平和博物館の活動と同じ？」と思った幸いです。

らいてうは、母親として子どものいのちを守る立場から世界平和をねがい、戦後は大国の核実験やベトナム戦争に反対、軍隊も基地も要らない戦争のない世界をつくろう、と訴え続けました。その平和のこころざしを現代に生かすことが「らいてうの家」のだいじな仕事だと思えるようになったのです。

開館は4月下旬から11月上旬までの土日月です（冬季は休館）。団体は事前に予約していただければ都合のつくかぎり平日でも受け入れます。上田駅から車で40分、交通不便なのでマイカーか団体のチャーターバスなどでおいでください。近くの無言館や山本宣治記念碑、松代大本営などを巡る「平和ツアー」も可能です。

問い合わせは、Tel&fax 03-3818-8626 NPO 平塚らいてうの会へ

ピースあいち報告

戦争と平和の資料館ピースあいち
事務局長 宮原 大輔

ピースあいちは今年度開館3年目に入ったが、入館者数は毎月平均5百人強であり、入場券の区分による内訳は大人80%、子ども（小中高生）20%となっている。これらは昨年度とほぼ同じである。

毎日の館の運営は専従職員1名のほか、運営委員、ボランティアさんが交替で5、6人のシフトを組んでオープンしている。毎月1回、館

長以下約20名の運営委員会で重要事項を協議し、約10の委員会がボランティアさんも参加して日常的に活動を行っている。

常設展示のほか、2週間から2カ月程度の企画展がほぼ年中行われ、またこれと組み合わせ、さまざまなイベントが開催されている。ピースあいちへの来館は1度で終わるものではなく、市民の方に何度も足を運んで平和への行動にして欲しいとの願いを込めて、さまざまな企画・イベントを行っているが、3年目は特に活発になった。

現在は、「'09ピースあいち所蔵品展ーモノが語る戦時下の暮らし」を2月6日までの予定で開催中である。これが終わると、5月4日の開館記念日に合わせた企画が始まる。今年のテーマは「名古屋空襲を知る～今、平和を考えるために」である。企画展のほか、空襲犠牲者墓碑銘版作品展示、追悼の集い、名古屋空襲体験者の語りの会、朗読等のイベント、名古屋空襲の遺跡めぐりツアーが企画中である。

新型インフルエンザの影響で、秋季には小学校からの団体来館が減ったのも今年度の特長であったが、1月2月にずれ込んだようである。今年度は愛知県・名古屋市からの事業受託で、県内の小学校で戦争体験を語る活動も始まっている。

開館1年目はあたふたと1年が過ぎ、2年目に落ち着きを見せ、3年目はたくさんの活動の回転軸がそれぞれに回り、活発化してきているといえよう。

立命館大学国際平和ミュージアムの活動報告：京都市

立命館大学国際平和ミュージアム
教育文化事業課鳥井真木

2009年6月20日、立命館大学朱雀キャンパスホールにおいて「私たちにとっての加藤周一フォーラム in 京都」（同実行委員会主催）を開催しました。“知の巨人”と呼ばれた評論家・加藤周一が2008年12月5日に89歳で亡くなって半年。こよなく京都を愛し、立命館大学国際平和ミュージアム初代館長を務めた加藤周一氏語り、その遺志を確認し、それぞれが活かして

いくつどいとして開催したこのフォーラムには、360名もの多くの聴講者が参加されました。

1992年より本館を会場にして開催する「第29回平和のための京都の戦争展 2009」（平和のための京都のための戦争展実行委員会）が、8月4日～8月9日まで開催されました。3,500名の参加があり、期間中、当館常設展示室の小中学生の無料公開を行い、夏休みの小学生が多く訪れ、熱心に見学する姿が見受けられました。

また第49回ミニ企画展示「戦時中の新聞・広告・ビラ」展が8月1日～30日まで開催されました。今展では、戦争末期の代用品を促進する報道を主とした新聞やちらしなどを紹介、戦争を助ける労働力となった子どもたちが読む雑誌や新聞紙面には戦況や呼びかけがどう書かれていたのか、子ども向けの紙芝居「少年突撃隊」（大日本画劇株式会社製作）や印刷物にもスポットを当てました。また当時の小学生をとりまく生活コーナーとして、代用品などの生活用品や玩具などを展示し、戦争の時代におかれた国民の生活の様子を紹介しました。

第50回ミニ企画展示「平和をモチーフに～落合峯子作品展」が9月12日～10月8日まで開催されました。画家の落合さんは、京都市立美術大学で西洋画を学び、約40年にわたりパステル画の制作を続けておられます。1990年代から作品のなかで核兵器廃絶を訴えるなど、平和について積極的なメッセージを発してこられました。今展では、落合さんが「戦争にノー、平和にイエス」という思いを込めた「鳩に託すヒロシマ・ナガサキの灯」や「世界の空に届け平和の願い」、9.11事件後の世界に思いを馳せた「平和を」のシリーズ画などの作品15点を展示しました。

第51回ミニ企画展示は、今年で3年目になる「立命館附属校平和教育実践展示」を10月11日～12月18日まで、5つの附属校各校の平和学習についての取り組みを展示しました。今回の企画は、立命館附属校の初等・中等教育段階での平和・人権教育の実践内容を紹介することを通じて、今日の小学生、中学生や高校生の平和・人権課題に対する意識、現代社会や世界との関わり方に対する認識を、展示物を通じて知ってもらおうとするものです。

秋季特別展「南の島の小さな奇跡 フィリピン・カオハガンのキルト展～持続可能な経済的

自立のあゆみ～」が10月1日～31日の会期で開催されました。フィリピンのセブ島沖にあるカオハガン島は、周囲2kmの小さな島です。1991年にこの地に移り住んだ崎山克彦さんは、1995年「南の島から」の活動を開始しました。以来電気も水道もトイレもなかった島で、衛生、医療、教育を中心とした「持続可能な自立」を目指す取り組みを進めています。また1996年から吉川順子さんの指導により、島民たちはキルト製作を始めました。島民たちは独特な色彩感覚、想像力、世界観に裏付けされた素晴らしい作品を生み出し、このキルトはフェアトレードによって販売され、今ではキルトの販売収入が、島の全収入の1/3を占めています。今展では、吉川さんのカオハガンキルトのコレクション、島の様子を伝える品々、写真家熊切啓介さんのカオハガン島の写真など約50点を展示しました。キルト販売など国境を超えたフェアトレードやエコツーリズムの可能性について考えるきっかけを提供し、また新たな参観者を開拓する展示会となりました。特別展関連企画として一般の方々より募集した「平和」をモチーフにしたキルト作品47点を1階ロビーで展示し、キルト展に華やかさを添えました。

立命館大学では、1995年から毎年開催している特別展「世界報道写真展 2009-WORLD PRESS PHOTO 09」が、今年は新たに札幌三越会場（9月12日～21日）を加え、10月1日～14日立命館アジア太平洋大学、10月17日～11月1日立命館大学びわこ・くさつキャンパス、11月3日～29日立命館大学国際平和ミュージアムでの4会場で開催され、18,000人余りの参観者がありました。世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している「世界報道写真コンテスト」の入賞作品（約200点）で構成した写真展で、今年で52回目を迎えました。今この地球上で起きているあらゆる出来事を、最高の技術と取材力をもって撮影した写真家たちの作品の数々は、人々に現実を強く訴える力を持っています。また関連企画として、ベトナム戦争をはじめ多くの戦場写真を取材し、世界に平和を訴えてきた報道カメラマン・石川文洋さんを招き、記念講演会「戦場で見た命（ぬち） どう宝」を開催しました。学生、一般を含め約210人の聴講がありました。

11月25日(水)衣笠キャンパス創思館カンファレンスルームにおいて、国際平和ミュージアム主催・立命館大学法学部共催による講演会「第1回国際平和・人権連続セミナー 平和の諸相を見る～ベルリンの壁崩壊と人生の転換～ある平和活動家の体験から」と題して、ドイツの著述家であり、元ドイツ連邦議会議員のベラ・レングスフェルト氏の講演会を開催しました。1989年のベルリンの壁崩壊前後のベラ・レングスフェルト氏自身の経験から、平和について語っていただきました。学生、一般を含め約150人の聴講がありました。

今年度の映画上映会は、前期は7月4日、立命館大学衣笠キャンパスにて、関西初公開となる映画『アメリカばんざい』を上映開催しました。2回の上映で約204名の来場があり、藤本幸久監督と君島東彦氏(立命館大学国際関係学部教授)の対談を行いました。後期は12月9日、立命館大学国際平和ミュージアム中野記念ホールにて、如月社の企画・協力を得て、関西初公開『台湾人生』を開催しました。2回の上映で約200名の来場があり、上映会終了後、酒井充子監督と安齋育郎国際平和ミュージアム名誉館長の対談を行いました。

その他、学校団体の教員対象の下見見学会を7月29、30、31の3日間を通じて、30校54人の参加、8月は20、21、27日の3日間を通じて18校34名の参加がありました。

8月1日、2日と、「夏休み親子企画『へいわ』ってなに??2009」を開催しました。高杉巴彦館長の挨拶のあと、安齋名誉館長の平和のお話があり、1日目(8月1日)は、京(みやこ)エコロジーセンターの職員の方と一緒に、ゴミの減量や環境問題について一緒に学びながら、ワークショップも行いました。2日目(8月2日)は、特別企画として、「京都漢字探検隊」を開催しました。今回は、「争」「戦」「和」など、戦争と平和に関する漢字をテーマに、漢字の成り立ちについて学びながら、あらためて平和について、参加者とミュージアムスタッフの大学生のおにいさん・おねえさんと一緒に考えました。2日間にわたり、130名の参加者がありました。

本年は新型インフルエンザ等の影響で、12月末までにのべ7,500名を超える見学者のキャンセル、延期がありました。一方では、7月26日、日本母親大会分科会が立命館大学衣笠キャンパ

スで開催され、当館による分科会開催や大会参加者による700名を超えるミュージアム見学がありました。他には京都での日本平和学会やうたごえ祭典 in 京都の開催にあわせて、ミュージアム見学の誘致に務めました。

第56回不戦のつどいが、12月8日立命館大学びわこ・くさつキャンパスで嵐の中の母子像前集会、12月9日国際平和ミュージアムでわだつみ像前集会が開催されました。1950年に制作され、1953年立命館大学に建立されたわだつみ像は、2010年はわだつみ像制作60年にあたる記念の年(還暦)を迎えます。

ひめゆり平和祈念資料館：沖縄

学芸員 普天間朝佳

2009年6月23日に開館20周年を迎えました。この節目にあたり、「ひめゆりの塔」の補修・改修を行いました。1957年に建てられた現在の「ひめゆりの塔」は劣化が進んでおり、補修の必要が生じていました。半世紀あまり大切にされてきた塔をこの先も大切に残して行くことを念頭に、塔全体を大理石のプレートで覆い、ゆりのレリーフを同型のブロンズ製のものにあらためました。また、塔には1974年に制作された刻銘板がついていましたが、これも、資料館が開館して以降新たに判明した戦没者を追加刻銘し、新しくしました。

今年度は多くの周年記念事業を展開しています。まず、2009年6月1日からは、第6展示室において企画展「ひめゆり学園(女師・一高女)の歩み」を開催しています。ひめゆり学徒の母校であり、沖縄における近代女子教育の先駆けとなった女師・一高女の歴史をふり返る企画展です。2010年3月31日まで。

8月には、立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長の安齋育郎氏をお招きし、平和講演会を開催しました。10代から80代までの幅広い年齢層の参加があり、世代を超えて平和を創っていくことの大切さを確認する会となりました。

8月1日からは、「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」を20日間に渡って開催しました。当館では、証言員(元ひめゆり学徒)が展示室での説明に加え、予約団体を対象に多目的ホールで体験講話を行っています。個人で訪れる方にも

ゆっくりと戦争体験を聞いていただく機会をつくることを目的に行われました。観光客の方をはじめ、県内からも多くの方にご参加いただきました。

周年事業の一方、調査研究活動の一環として、「証言員一人ひとりの戦跡めぐり」、「証言員一人ひとりの戦前・戦後体験の聞き取り」と題した聞き取りを行っています。あらためて証言員（元ひめゆり学徒）一人ひとりの戦争体験を、戦場跡で時間をかけて聞き、また、戦争体験に着目していると聞き落としてしまいがちな、ひとりひとりの戦前と戦後の体験についても時間をとって聞きとろうとするものです。

太平洋戦史館：岩手

館長 岩淵宣輝

12月2日に出発した西部ニューギニア方面の政府派遣遺骨収集団（厚労省職員2名、太平洋戦史館会員6名）は、17日朝291柱の兵隊さんたちをお連れして帰国し、同日、千鳥ヶ淵戦没者墓苑で遺骨引渡式が行われました。

この戦域の遺骨収集は、民間団体である戦史館が現地情報を収集し、会員が自費で現地調査に参加して戦没者の遺体を捜索、それを厚労省に報告して遺体収容を要請し、ようやく政府派遣遺骨収集事業が実現するという手順です。この戦域の遺骨収集が、戦史館の要請で再開されてからちょうど10年になりますが、収容数は年々減少するどころか、新たな発見が続いています。今年は3月に108柱を収容し、その後に調査をした場所、ビアク島アミアムダム村や、ジャヤプラ近郊プアイ村だけで今回は291柱です。戦没者の遺体は、地表をわずか掘るだけで戦場にたおれたままの姿で発見されますが、今回は、生活ゴミの地層の下から多数発見され、この現場で発掘作業にあたった団員は全員やりきれない思いでいっぱいでした。人は死んでも人であるはずなのに…未帰還兵捜索はまだまだ続きます。

アウシュヴィッツ平和博物館

学芸部 我妻英司

当館は、アウシュヴィッツ収容所跡を保存するポーランド国立アウシュヴィッツ博物館より提供を受けた関連資料や犠牲者の遺品を展示する民間非営利の博物館です。1988年から2000年まで全国110カ所を巡回し、延べ90万人の来場者を記録した「心に刻むアウシュヴィッツ展」の結実として2003年に福島県白河市に開館しました。

昨年度は、国立教育政策研究所の初等中等教材・授業開発の一環として当館の資料を活用した実験授業を藤岡東中学（群馬）と品川小（東京）で行いました。日本人の児童生徒に欠けている自ら考え議論する能力に必要なキーコンピテンシー（鍵になる能力）の向上を目指して、従来の教科にとらわれない科目横断型の教材・授業の開発を行っているプロジェクトです。

今回は、国語を中心に道徳・特活・総合の各科目を使い、「Citizenship 市民性」を育てる授業・教材の開発を行うことになり、関東地方の約30の小中学校の先生が各々独自のテーマを設定し、月1回霞ヶ関の国研で開かれる研究会に集いました。私も毎回参加させていただき、担当の下田好行研究官と共同で、アウシュヴィッツ関連資料やコルベ神父、杉原千畝らの行った人道行為を紹介する授業開発を行いました。市民性という幅広いテーマの中から「平和と人権」に焦点を絞り、命の尊さや他者への思いやりなどを自然に感じ取れるよう工夫しました。

受験偏重の教育が子どもたちの人間性を蝕み続けておりますが、私たちの「出前授業」が「本当に大切なこととは何か」を考える出発点となるよう願っています。

問合せ先 NPO 法人アウシュヴィッツ平和博物館
〒961-0835 福島県白河市白坂三輪台 245
TEL 0248-28-2108 FAX 0248-21-9068
URL: <http://www.am-j.or.jp>

平和資料館・草の家：高知

研究員 藤原義一

高知市の平和資料館・草の家は、戦前の高知の反戦平和の詩人・楨村浩（まきむら・こう）の資料を発掘し、研究成果を出版しています。

県外、海外からも「楨村のことをもっと知りたい」というかたが、草の家を訪れます。

楨村には、詩「間島(かんとう)パルチザンの歌」(1932年)があります。間島は、中国東北に日本が作ったカイライ国・満州(32年3月1日-)の朝鮮民族の居住地。楨村は、この詩で朝鮮を植民地支配する大日本帝国とたたかう間島のパルチザンに想いを寄せました。

この11日には韓国京畿道在住のフリーライター・戸田郁子さん(50)がこられました。彼女は、かつて間島(かんとう)と呼ばれた地、中国の延辺(えんぺん)朝鮮族自治州を幾度も訪れているといいます。

戸田さんが高知に来られた直接の理由は次のようなことでした。

「先日も延辺を訪れたのですが、恩師の延辺大学歴史学部の朴昌昱(パク・チャンウク)教授(80)が国民優級学校(朝鮮人の4年制の小学校)の4年生のとき(1938年ころ)、東京帰りの背の高い男性の李(リー)先生が歴史の時間に『日本人、日本人って悪者ばかりとお前たちは思っているかもしれないけど、日本にもこういう人がいて、こういう詩を書いているんだ』と言って、朝鮮語で『間島パルチザンの歌』を読んできたというのです。帝国主義の日本にそんな人が……と思ったそうです。『間島パルチザンの歌』が間島の地で読まれていたということは、すごい驚きでした」

戸田さんは、草の家では岡村正弘館長、楨村を研究している猪野陸(いの・むつし)さんと懇談。そして、草の家の楨村についての展示・資料を見たあと、岡村館長らの案内で高知市内の楨村の墓、城西公園の「間島パルチザンの歌」の詩碑などを見学しました。

戸田さんは、楨村と「間島パルチザンの歌」を紹介する文章を朝鮮語で書き、延辺朝鮮族自治州で発表する予定だそうです。

NPO法人岡まさはる記念長崎平和資料館

高實康稔(理事長)

2009年下半期の主な活動を報告します。

- ・ 7月5日：機関紙「西坂だより」54号発送。
- ・ 7月20日：第5回「岡政治さんに学ぶ会」

を催し、日本キリスト教団銀屋町教会牧師で当館理事でもある原和人さんが「現実の社会で、キリストの愛と平和を实践した岡さん」について語り、参加者との質疑応答を交えて、岡さんの聖書の読み方や常に虐げられた人々の側に立った生き方から学ぶ貴重な機会となった。

・ 8月1日：長崎の市民運動「ピース・ウィーク」に参画し、「早田一雄さん講演会」を当館が中心となって企画・実施。早田さん(79歳)は、ドイツのケルンに「ヒロシマ・ナガサキ公園」が実現(2004年)して「核兵器廃絶碑」も建立される契機となった自らの海外平和行脚の軌跡を語られ、参加した高校生にも大きな刺激を与えた。

・ 8月13～19日：第7回「日中友好・希望の翼」の旅。公募して派遣する大学生2名を含む一行7名で、上海、南京、徐州を巡り、それぞれの地で日本軍の残虐行為を資料館見学と生存者や遺族の証言によって学んだ。中国の学生との討論・交流会もあり、派遣学生たちは受けた衝撃を今後の日中友好の活動に生かすことを誓っていた。今回は当館で11カ月の良心的兵役忌避の代替勤務を終えたドイツ青年、ゲオルク・フライゼ(Georg Freise)さんも参加し、大学進学後のテーマとしている「アジア研究」に大いに役立ったと語っていた。

・ 9月13日：4人目の良心的兵役忌避ドイツ青年、アレクサンダー・ヴァイス(Alexander Weiss)さん(19歳)が長崎に到着。翌14日から早速勤務開始。快活な性格で、日本語も日増しに上達し、当館の受付ボランティアたちとの会話ははずんでいる。

・ 9月19～23日：第2回「731部隊罪証陳列館訪問の旅」。2005年に同館と友好館提携を結び、念願の再訪問を果たすことができた。一行11名で、平頂山殉難同胞遺骨館、撫順戦犯管理所、“九・一八”歴史博物館も巡り、初訪問の団員も多く、中国東北部での日本軍の残虐行為に声を失う旅であった。政権交代を機に、日本政府は731部隊の人体実験と細菌戦の事実を潔く認め、謝罪すべきだという認識を深めた。

・ 10月4日：機関紙「西坂だより」第55号発送。

・ 10月17日：アレクサンダー・ヴァイスさんと資料館関係者・支援者との交流会。良心

的兵役忌避ドイツ青年の受入れは幅広い支援者の資金提供で成り立っており、今回も食事を共にする懇談会を行い、親近感を深めた。

・ 11月23日：NPO法人としての第7回年次総会。前年度の事業報告、決算、会計監査と新年度の事業計画、収支予算等の承認を得たが、民間団体としての設立後15年目に入り、政治状況の変化とも相まって当館の使命の重要性が強調される総会であった。

・ 12月9日：客員研究員・全恩玉(チョン・ウノク)さんによる「楽しく学ぶ韓国語」講座の開始。研究員終了の2010年8月まで続けられる。

・ 12月12日：第9回「南京大虐殺生存者長崎証言集会」。証言者・張国棟さん(81歳)と研究者・瀋麗国さん(南京大虐殺史研究会常務理事)を迎えて、張さんは9歳で父親が日本兵に殺されたことを嘆れた大きな声で涙ながらに語られ、瀋さんは南京大虐殺の概要のみならず、上海から南京へ至る各地での残虐行為にも具体的に言及し、大虐殺の前史(4ヶ月戦争)にも着目すべきことを力説した。質疑応答も充実し、とりわけ当時の南京の人口問題に関して、統計と研究結果を踏まえた明解な回答が印象的であった。

TEL&FAX:095-820-5600

<http://www.d3.dion.ne.jp/~okakinen>

「アフリカ、中東の平和博物館訪問から学んだことがら」一和解のキーワードは「市民力」と平和構築は「3k(観光・健康・環境)の融合」から一

立命館大学教授 桂良太郎

2009年9月から12月まで、シンガポール大学にて在外研究期間を利用して訪問したアフリカおよび中東の平和ミュージアムとその概要について紹介し、訪問の感想を最後に記したい。

1. 南アフリカ / ケープタウン

・デズモンド・ツツ大司教の聖ジョージ大聖堂
ケープタウンの中心部に位置し、イギリス植民地時代のカソリック教会で、内部には、デズモンド・ツツ大司教たちのアパルトヘイト運動の足跡を写真やビデオによって市民に分かりや

すく紹介するコーナーが設けられている。教会は多くの人種差別撤廃を願う市民たちの熱い思いによって支えられており、いまでもアパルトヘイト運動の精神的拠点でもある。

・ロビン(ロベン)島博物館

ケープタウンの沖合に浮かぶロベン島は、アパルトヘイト時代、おもに政治犯が収容されていた黒人専用の刑務所島で、ネルソン・マンデラ氏も収容されていた。現在は島全体が博物館としてケープタウンの新しい観光名所となっている。1999年にユネスコの世界文化遺産に島全体が登録されている。刑務所内はこの刑務所に実際に収容されていた人々がボランティアガイドとして訪れた人々を案内している。

2. 南アフリカ / ヨハネスブルグ

・ヘクター・ピーターソン博物館

この博物館はソウェット(黒人居住区)にあり、観光ルートや冊子「世界の平和博物館」にない館であったが、たいへん重要な平和博物館であると思われる。1976年の暴動時に、警察官に発砲され、犠牲になった当時13歳だったヘクター・ピーターソンという少年を記念して建てられた館である。歴史を後世につたえることと、人種的偏見をなくすための教育を兼ねた館内は、さまざまなアートの力をとりいれ、訪れた人々のこころを癒してくれている。

3. タンザニヤ / ダル・エス・サラーム

・国立博物館

(予定していた、平和記念博物館は離島にあり、また休館とのことで行くことができず、国立博物館を見学した。) ダル・エス・サラームとはアラビア語で「平和な港」という意味とのこと。かつて東アフリカ沿岸で貿易で栄えた天然の良港である。イギリス植民地時代の総督の乗用車が館の入り口に飾られていたのが印象的である。

4. ケニヤ / ナイロビ

AFRICOM International Council of African Museums(アフリカ博物館国際委員会)

ここは全アフリカに存在する平和のための博物館に関する情報センターであり、さまざまな情宣活動を通じて、アフリカの平和博物館同士のネットワークングを行っている。冊子”Museums for Peace Worldwide” および「ミ

ューズ(英語版)」がたいへん喜ばれ、ぜひとも2013年開催予定の第7回国際平和博物館会議には出席したいとの意向である。

アフリカはいま大きく経済開発がすすみ、環境破壊や人権侵害の問題が大きくクローズアップされつつあること、それに対して平和のための博物館の役割がますます重要になってきて、博物館同士の協働が今後の課題であるとのことであった。

(Community Peace Museums Heritage Foundation は連絡とれず訪問することができなかった。)

5. エジプト / カイロ

・ 国立歴史博物館

ツタンカーメン展がかつて日本にて開催されたとき、ほんの数分しか観ることができなかったのを思い出しながら、今回は十分な時間をかけて、館内を見学する。ここはエジプト文化、とくにピラミッドに代表される古代エジプト文化のさまざまな歴史遺産が集約された世界でも稀な歴史博物館である。すべてを観るためにはおそらく一週間以上かかるぐらい、多くの展示物によって、しかもそれらは巨大な石仏遺産もふくめスケールの大きな博物館である。ただ厳しいセキュリティチェックおよび撮影禁止の徹底さには、政情不安と治安維持にあえぐエジプト政府の状況がうかがわれた。

6. イスラエル / エルサレム

・ ホロコーストミュージアム (Yad Vashem)

第二次世界大戦中にナチス・ドイツによって虐殺された600万人のユダヤ人を慰霊する目的で建てられた博物館で、記念と記憶(ヤド・ヴァシエム)というヘブライ語にちなんで付けられた名前である。建物正面にある高さ30mにおよぶ円柱には、「忘れるな」という意味のヘブライ語が刻まれていた。館内には最近アートミュージアムも併設され、戦争による被害だけを物語るのではなく、未来の平和創造において、アートの力をしっかり発信しながら、ホロコーストに関する調査研究所も隣に併設されている。庭園には、ユダヤ人をナチスから救った日本のシンドララーといわれる杉原千畝さんの記念樹が植えられ、自然との共生感を漂わせている。

感想とまとめ

今回のアフリカ、中東の平和博物館を訪問して、共通したキーワードは、館は今や世界の文化遺産として、多くの観光地としての役割をになわされ、世界中からの来館者たちによって成り立っているという現実を見ることができた。

そして、それらの館に共通していたことは、歴史の悲惨さを少しでも和らげるために、和解と共生はまず自然との共生からという、まさしく景観保全も含め、まわりとの環境づくりに大きな努力が払われていたことに気付いた。とくに、島全体が世界歴史遺産に登録された、かつての黒人収容施設のあったロベン島の維持管理に、日本の先端技術が役立っていることを知らされたり、さまざまな歴史遺産である建物をそのまま維持していくための環境技術や保存科学の重要性がますます今後とも脚光があびるようになってきているという事実、こうした歴史遺産保存の今後の課題を知ることができた。

そして最後にどの館もアートの力こそが、これからの平和構築のおおきな原動力になること、そしてそうしたアートも一握りの芸術家による作品だけでなく、多くの一般市民によって創り上げられた作品や館に対する愛着を、ボランティアガイドに代表される、戦争や人種差別を実際に経験した「語り部」たちによって、その館は成り立っていることもあらためて、アフリカ、中東の博物館も、苦慮していることをしっかり見ることができた。

むしろ、アジアの特に私がいたシンガポールは、いまだに、戦争記念館として観光地化し、真の和解のための、また、平和構築のための施設になっていないことに懸念を覚えた。たしかに、経済的にも、まだまだアフリカおよび中東はこれから多くの先進国の支援が必要ではあるが、アパルトヘイトに代表される、アフリカの住民(黒人たち)の平和への願い、またホロコーストミュージアムをささえる、世界中から戦争による虐殺をなくすために必死にボランティア活動している地元の市民たちのあの熱意はいまでもこころが揺り動かされる。

今後の平和博物館の方向性で、重要なキーワードは、「市民力」と「観光、環境、健康の3kの融合」であると考え。そしてその2つのキーワードはまさしく「アートの力」であろう。

アートとは、人間の文化であり、生き抜く英知であり、すべての「技」でもある。

紙芝居をはじめとする艦砲被災体験記などを展示し、当時を知らない世代にも戦中の釜石の様子を感じ取って欲しいと開かれたものです。

Tel&Fax:0193-22-2046

<http://www.city.kamaishi.iwate.jp/kyoudo/index.html>

国内ネットワークニュース

おびひろ動物園：北海道

企画展「戦争で消えたどうぶつ」がこども会館で2009年8月1日～31日の会期により開催されました。内容は第2次世界大戦末期のどうぶつ物語で、3部構成です。1部は「上野動物園」で、空襲に備えて危険性のある動物をあらかじめ殺しておくという命令が軍部から出され、どのような方法でどうぶつたちが殺されたかをまとめていました。2部は戦時中に犬や猫も犠牲になったことを取り上げていました。3部は戦場で軍馬、軍犬、軍鳩などのどうぶつたちの命が消えていったことを伝えていました。

Tel:0155-24-2437 Fax:0155-24-2439

<http://www.obihirozoo.jp/>

浦幌町立博物館：北海道

小企画展「真夏の残像、あの夏の熱き想い『戦争体験を伝える』」が浦幌町教育文化センター1階特別展示室で2009年8月6日～19日の会期により開催されました。

Tel:015-576-2009 Fax:015-576-2452

釜石市郷土資料館：岩手

2009年度「釜石艦砲戦災展」が体験学習室で2009年7月10日～9月27日の会期により開催されました。1945年、釜石市は7月14日と8月9日の2度にわたり、連合軍による艦砲射撃の標的になりました。これによって多数の命が奪われ、鉄の町は廃墟と化しました。軍関係者のほか、捕虜や労働者などの外国人、一般市民が犠牲となりました。戦後64年が経過して、釜石市民は艦砲射撃を受けたことだけでなく、艦砲射撃という言葉さえも、知らなくなっています。

本展ではアメリカ軍による艦砲射撃の記録や砲弾破片などの実物資料、また故石橋巖さんの

水戸市平和資料館開館：茨城

水戸平和記念館が2009年8月1日、水戸市三の丸1-4-19にあるビルの2階・3階に開館しました。水戸空襲では1945年8月2日未明、アメリカ軍のB29爆撃機160機が2時間近くにわたって約1145トンの爆弾投下しました。市街地のほとんどが焦土と化し、罹災戸数1万104戸、罹災人員5万605名、死者242名、重軽傷者1293名が犠牲となったと記録されています。市民団体「水戸平和記念館を創る会」は空襲の悲劇を後世に末永く伝えようと、犠牲者の遺族らが1994年結成したものです。関連資料1000点以上を収集し、それらを常設展示できる平和記念館の建設を市に要望し続けてきて、戦争の悲惨さと平和の大切さを学ぶ茨城県内初の公立記念館が実現したものです。記念館には、戦災犠牲者の名簿、戦時中の衣服・道具、水戸空襲の爆弾の残骸、B29爆撃機のプロペラなどが展示され、写真・説明パネルやビデオなどで空襲などの様子を伝えています。

水戸市立博物館：茨城

特別展「焦土からの復興」が3階と4階の展示室で2009年10月10日～11月23日の会期により開催されました。戦中・戦後の時代を、自身の体験を通して語れる人が少なくなってきました。戦争時代における庶民の犠牲や苦労は大きく、その事実は1945年8月2日の水戸空襲とともに、きちんと語り継いでいかなければなりません。そして、戦争中よりも苦しかったという戦後の生活もまた、「戦争がもたらしたもの」として忘れてはならないでしょう。食料不足や日常生活の不安という目の前の問題だけでなく、大きな政策の転換や教育の変化に伴ってそれまでの価値観が一変する中で、戦争の痛手から必死に立ち上がってきた人びとの営みが、現在の私たちの生活の基礎を作り上げました。展覧会

では戦中・戦後を生きた市民の生活を追っています。凶録を刊行しています。

関連して、戦争と平和を考えるバスツアーが2009年11月6日に開かれ、東京大空襲・戦災資料センターなどを見学しました。

講演会「わたしは戦争を忘れない」が2009年8月2日に開かれ、戦争を体験した大山好子さん、佐藤隆夫さん、市原毅さんの3の方が空襲の状況や戦後の生活を語り、戦争は人殺し2度と起こしてはならない、と話しました。同様の講演会は8月15日にも開かれ、別の方が話されました。

Tel:029-226-6521 Fax:029-226-6549
<http://business4.plala.or.jp/shihaku1/>

栃木県立博物館：宇都宮市

人文系テーマ展「戦中・戦後の市民生活」が2009年7月18日～9月23日の会期により開催されました。戦争に必要な費用を集めるために発行された各種債券、市民の娯楽だった紙芝居・レコード、配給制にあたって発行された各種配給切符・通帳、戦後の墨塗り教科書・農地証券、出征者の関係資料など、戦中・戦後期、市民生活に深く関わった資料を展示していました。展示資料リストを作成しています。

Tel:028-634-1311 Fax:028-634-1310
<http://www.muse.pref.tochigi.lg.jp/>

埼玉県平和資料館：東松山市

企画展「戦時の暮らし、みて、ふれて」が2009年7月18日～9月27日の会期により開催されました。青い目の人形や戦時中の生活用品など実物資料を展示し、触れる資料コーナーや体感実感コーナーもあって、灯火管制などの体験ができるようになっていました。

テーマ展「世界の平和と人々の幸せのためにー埼玉の子どもたちの取り組みを中心にして」が2009年8月4日～11月8日の会期により開催されました。埼玉県内の学校の児童生徒やNPOの国際平和貢献活動の様子を写真パネルや資料で紹介していました。

平和朗読会は戦争や平和をテーマとした文学作品の朗読を生演奏のBGMと共に聴くものです。第1回は2009年8月8日に開催され、川越

市の朗読グループ「表現の会」が朗読しました。第2回は10月31日に開催され、「冬が来る前に」と題し、東松山市の朗読サークル「まっは会」が朗読しました。

戦争中の体験を聞く会は戦争体験者との交流をとおして、戦争の悲惨さと平和の尊さを考えるもので、2009年8月15日に開かれました。富田国治さんが、乗っていた駆逐艦がアメリカ軍の魚雷を受け、九死に一生を得た経験を踏まえて、戦争はもうこりこり、戦争ムードにしたいくないことが願いであると話されました。

8月の映画会は16日に「紙屋悦子の青春」を上映しました。

9月の映画会は19日にアニメ「マヤの一生」とアニメ「ちいちゃんのかげおくり」を上映しました。「マヤの一生」は、戦時下の鹿児島で熊野の子犬がもらわれて来て、マヤと名付けられ、家族の愛情の下に成長した狩猟犬の物語です。「ちいちゃんのかげおくり」は、出征する前日、家族でお墓まいりをした帰り道で、おとうさんが青い空を見上げて「かげおくり」を教えてくださいましたが、やがてちいちゃんの家も空襲にあうという物語です。

10月の映画会は17日に開かれアニメ「はだしのゲン」を上映しました。ゲンの父親は、戦争反対を叫びつづけたため、一家は非国民よばわりされても、みんなで力をあわせて明るく楽しい家族をつくっていましたが、1945年8月6日の原爆投下によって大きな被害を受けたという物語です。

11月の映画会は14日にアニメ映画「火垂るの墓」を上映しました。これは神戸空襲にあった幼い兄妹を描いた物語です。

12月の映画会は12日に「黒い雨」上映しました。これは広島原爆を描いた作品です。

Tel:0493-35-4111 Fax:0493-35-4112
<http://homepage3.nifty.com/saitamapeacemuseum/>

蕨市立歴史民俗資料館：埼玉

夏の企画展 第20回平和祈念展「写真館・蕨ー戦中から戦後へ」が2009年8月1日～9月27日の会期により開催されました。戦時中に撮影された写真から、蕨の戦中・戦後の暮らしを紹介するものです。写真は、出征関係では、壮行

会・帰還・戦死者葬列など、学校関係では 軍事教練・奉安殿・体錬・なぎなた演技・運動会・高等女学校生徒の開墾・青少年団のさつまいも収穫など、戦争ごっこ、婦人会関係では、国防婦人会分会結成・廃品回収・傷病兵慰問など、隣組関係では、紀元 2600 年奉祝祭礼・防空訓練・農作業・ドングリ工場・ドロ列車など、戦後のものでは、憲法発布・成年式・音楽の授業・進駐軍立会の選挙開票・引揚者住宅などでした。臨時召集令状、開戦と終戦の新聞、出征兵士入営時の品、名誉の家・誉の家の表札、戦争ごっこの道具、愛国百人一首、ヒノマルカルタ、布製グローブ、ファイバー製ランドセル、パン焼き、ゆたんぼ、電熱器などのジュラルミン製品、DDT、チェッカー、アメリカ式行軍将棋などの実物資料も展示していました。リーフレット型の図録を作成しています。

Tel:048-432-2477

<http://www.city.warabi.saitama.jp/rekimin/index.htm>

入間市博物館アリット：埼玉

企画展「平和祈念資料展」が 2009 年 8 月 7 日～9 日の会期で開かれました。第 2 次世界大戦中の千人針や広島学徒動員先で被爆し亡くなった男子生徒が着ていたシャツとズボンなど、戦争被害を伝える資料約 100 点を展示していました。

Tel:04-2934-7711 Fax:04-2934-7716

<http://www.alit.city.iruma.saitama.jp/>

市川文学プラザ：千葉

宗左近生誕 90 年 永井荷風生誕 130 年・没後 50 年記念・企画展「詩 平和への響き—宗左近・永井荷風によせて」が 2009 年 6 月 13 日～10 月 12 日の会期で開催されました。詩人・宗左近 (1919-2006) は、東京空襲で母を亡くした体験をもとに、詩集『炎える母』を書き上げ、その後、人間存在の根源を問う作品を多く著しました。宗の生涯と作品の魅力を、市川の詩人とともに紹介していました。また、東京空襲で自宅である偏奇館を焼亡し、市川に移り住んだ作家・永井荷風 (1879-1959) は、訳詩集『珊瑚集』や詩集『偏奇館吟草』などを著しており、

本展では、詩作をテーマに荷風の作品を展望していました。併せて、脚本家・水木洋子 (1910-2003) についても、戦争との関わりを通して紹介していました。特に、宗が戦中書き記した日記や自筆原稿、荷風が戦中書き記した「断腸亭日乗」の元になった手帳、亡くなる直前に書き記した訳詩の草稿なども公開していました。

Tel:047-334-1111 Fax:047-332-7364

<http://www.city.ichikawa.lg.jp/cul01/bunpla.html>

せたがや平和資料室：東京

特別展「ノーモア戦争 太平洋戦争の惨禍を語り継ぐ」が教育センター 1 階エントランスホールで 2009 年 8 月 1 日～31 日の会期により開催されました。開催趣旨は今日の日本の平和と繁栄が戦争体験者の労苦の上に成り立っており、戦時下の被害を中心に悲惨な戦争体験を語りつぐことにありました。壁面写真パネル構成は、

1. 開催にあたって、
2. 太平洋戦争の概要、
3. 太平洋戦争の開戦、
4. 海外のようす、
5. 戦時下の窮乏生活、
6. 戦時下の子どもたち、
7. 世田谷の戦争関係資料、
8. 世田谷の子どもたち、
9. 各地の空襲、
10. 戦場に散った若者たちと最後の戦場・沖縄、
11. 原爆の悲劇、
12. 太平洋戦争の終戦 でした。展示されたモノ資料は、「出征兵士の出立」では、のぼり、日の丸寄せ書き、軍服、たすき、ゲートル、「戦時下の食べ物の復元模型」では、さつまだんご、雑穀めし、水団、雑炊、ズイキの煮物、「戦時下の生活物品」では、ラジオ、お櫃、洗濯板、薬箱、柱時計、升、灯火管制の笠・おおい・電球、「戦争関係」では、飯ごう、水筒、奉公袋、陶器製地雷・手榴弾、焼夷弾の筒、B29 翼の破片などでした。

続けて、地域巡回展が、北沢タウンホールで 9 月 2 日～15 日の会期により、烏山区民センターで 9 月 17 日～30 日の会期により、尾山台地区会館で 10 月 2 日～15 日の会期により、砧総合支所で 10 月 17 日～31 日の会期により、それぞれ開催されました。

Tel&Fax:03-3703-8100

<http://www.city.setagaya.tokyo.jp/030/d00005024.html>

東京大空襲・戦災資料センター：江東区

2009年第2回特別展「東京・ゲルニカ・重慶空襲写真展—空襲記録・研究の新展開」が2階会議室で2009年7月22日～9月6日の会期により開催されました。東京大空襲・戦災資料センター編『岩波DVDブック Peace Archives 東京・ゲルニカ・重慶—空襲から平和を考える』の刊行を記念して開かれたもので、DVDブックに収録した写真を中心に、東京空襲、日本本土空襲、重慶爆撃、ドレスデン空襲、ゲルニカ爆撃などの被害を示す写真約120点を展示しました。

東京大空襲・戦災資料センターの戦争災害研究室主催の第3回シンポジウム『「無差別爆撃」の転回点—ドイツ・日本都市空襲の位置づけを問う』が2009年7月27日に、明治大学駿河台校舎研究棟において、70名の参加で開催されました。今回シンポジウムでは、1930年代のドイツ・日本などによる空襲と、冷戦期という新たな空爆の時代をつなぐ、第2次世界大戦期の連合国によるドイツや日本への爆撃について検討を加えようとしていました。シンポジウムでは、まず、日本大学法学部准教授で戦争災害研究室研究員の大岡聡さんが司会として開会の挨拶をし、続けてシンポジウムの問題提起をしました。第1報告は元・麻布高校教諭の中山伊佐男さんの「日本への住民選別爆撃の実相—米軍資料研究から」です。中山さんは空襲体験を踏まえて、長年にわたるアメリカ軍資料研究を続けてこられました。その成果として日本都市空襲の実相を話され、都市空襲把握の新たな視角を提起されました。第2報告は大阪大学大学院准教授の木戸衛一さんの「ドイツにおける空襲研究をめぐって」です。これはドイツにおける空襲研究を初めて体系的に紹介したものです。東京大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員の柳原伸洋さんも、論文「ドイツの空襲展示—統一後ドイツ・ドレスデンを中心に」を提出する形で参加しました。この論文もドイツの空襲展示について、初めての学問的な紹介です。このシンポジウムの報告書は2009年11月24日に刊行されました。

「東京大空襲・戦災資料センター2009年夏の親子企画 みて、きいて、つたえよう—東京大空襲」が2009年8月の土曜日に、東京大空襲・戦災資料センター2階会議室で開催されました。

第1回は8月1日に、北原久仁香さんによる絵本「おはじきの木」の朗読とオカリナ演奏、竹内静代さんの空襲体験のお話が、第2回は8月8日に、かみしばいグループ「たけのこ」による紙芝居「幼い日の炎の夜を」、橋本代志子さんの空襲体験のお話が、第3回は8月15日に猫座による一人音楽劇「猫は生きている」が、第4回は8月22日に、大貫勝敏さんによる紙芝居「あしたのやくそく」、二瓶治代さんの空襲体験のお話が、それぞれありました。また、今年は絵手紙を書いたり、折り鶴を折ったり、木工で鳩をつくったりするような、ワークショップ的な要素も毎回取り入れていました。

昨年の学習講座に続き、第2回連続公開講座として、岩波DVDブック刊行記念「東京・ゲルニカ・重慶—世界の空襲被災都市から戦争をとらえる」が2009年10月3日、17日、31日、11月14日、28日の5回にわたって開催されました。今回の講座は、DVDブックの執筆者たちが、ブックの内容に新たな内容を付け加えて、わかりやすく伝えるようとするものでした。初回は東京大空襲・戦災資料センターで開き、早乙女勝元館長が「開講にあたって」として、イギリスでの平和学研究者との交流の成果を報告しました。第2～5回は明治大学駿河台校舎研究棟の会議室で開かれ、第2回は荒井信一さんが「無差別爆撃と帝国意識—ヨーロッパを中心に」を、第3回は山辺昌彦さんが「史料に見る東京大空襲とその被害の実相」を、第4回は山本唯人さんが「空襲と市民—市民は空襲からどう身を守ったのか」を、第5回は前田哲男さんが「重慶爆撃と現代戦争」を、それぞれ講義しました。

Tel:03-5857-5631 Fax:03-5683-3326

<http://www.tokyo-sensai.net/>

高麗博物館：東京・新宿区

企画展「失われた朝鮮文化遺産—植民地下での文化財の略奪・流出、そして返還・公開へ」が2009年8月12日～11月29日の会期で開催されました。日本は朝鮮を植民地としていた間に、朝鮮文化財を破壊たり、朝鮮文化財を略奪や流出により日本へ持ち込んだりしました。多くの文化財は日本に残されましたが、一部は韓国へ返還され、公開されています。これら朝鮮

文化財の歴史をパネルなどで紹介する展示会です。

Tel&Fax:03-5272-3510

<http://www.40net.jp/~kourai/>

渋沢史料館：東京・北区

渋沢史料館は毎年夏に「テーマ展シリーズ“平和を考える”」と題して、平和に関連する資料を紹介する展覧会を開催しています。第2回の2009年は「渡米実業団100周年記念 渋沢栄一、アメリカへー100年前の民間経済外交」を企画展示室で2009年8月15日～9月23日の会期により開催しました。渡米実業団とは、渋沢栄一を団長として、東京や大阪など大都市の商業会議所などで活躍する、約50人の民間を中心とする団員で組織されたものです。一行は1909年8月19日に横浜を出港し、約3か月にわたり、アメリカの産業、経済、政治、社会福祉、教育などの施設・機関を見学し、また、第27代アメリカ大統領のウィリアム・タフトや、発明王のトーマス・エジソン、鉄道王のジェームズ・ヒルなど、各界の有力者と会見しています。2009年は、渡米実業団がアメリカを訪問して、100周年を迎えます。このテーマ展では、渡米実業団にまつわるさまざまな資料から、今から100年前に、渋沢栄一をはじめとした日本の実業家たちが、アメリカでどのような視察や体験をしたのかを展示し、平和について考える機会とするものでした。

Tel:03-3910-0005

<http://www.shibusawa.or.jp/museum/>

昭和館：東京・千代田区

特別企画展「記された想いー手紙と日記に見る戦中・戦後」が3階の特別企画展会場で2009年7月25日～8月30日の会期により開催されました。戦時中、戦地にいる兵士とその家族が近況を伝えあえる唯一の手段は、手紙のやりとりでした。当時は検閲制度があったため、本心を書くことは難しい状況でした。日記からは、手紙では書けない当時の情勢なども読み取ることができます。また、日記には戦争の影響で変化していった日々の生活や、終戦後社会が復興してく様子が、そのときの想いとともに記され

ています。昭和館がこれまで収集してきた手紙や日記などの資料とあわせ、写真や当時の思い出して書かれた絵手紙を展示し、戦中・戦後の生活の様子、人びとの想いを紹介するものでした。

Tel:03-3222-2577 Fax:03-3222-2575

<http://www.showakan.go.jp/>

昭和の暮らし博物館：東京・大田区

「小泉家に残る戦争」展が2009年8月1日～30日の会期により開催されました。「戦争はいけない」と言い続けるために、今なお家庭に残る戦争の傷跡から、平和への意志を再確認するために、開催しているものです。「小泉家と戦争」では、集団疎開前の家族写真、疎開地での写真などを、「男たちは皆兵隊に取られた」では、軍事郵便、千人針、奉公袋ー軍隊手張(複製)・召集令状(複製)、貴重品袋、除隊さかずき、除隊記念スフの風呂敷、軍隊の綿の風呂敷、海軍下士官の帽子などを、「戦争中のこども」では、福田雅子さんの戦時中の絵日記、スクラップブック、慰問袋、ビスケットの缶、アメリカのエプロンなどを、「戦争の中の暮らし」では、婦人標準服、国防婦人会たすき、モンペ、雑のう、木口、衣料切符、防空頭巾、防毒面、鉄帽、ゲートル、飯ごう、水筒、リュックサック、歴史写真、婦人雑誌ー主婦の友、開戦と終戦の新聞などを、「占領下の日本」では、代用品ーボタン・フック・おろし金、パン焼き器、鼻緒製造器、廃品修理親子針、アルミ皿、電熱器、焼け跡から掘り出した紅茶茶碗、簡易精米器、粉ひき器、すいとんの再現などを、それぞれ展示していました。

企画展「在日のくらしーポツタリ(風呂敷包み)一つで海を越えて」が2009年9月5日～2010年8月末の会期により開催しています。在日コリアンの方がたのくらしの様子を、衣・食・住の道具から追う企画展です。展示構成は、「概説」ー在日朝鮮人・渡日の理由、「ある在日の歴史」ー李秀淵はなぜ日本に来たのか、「住まい」ー住まいにみるくらし・東京周辺の集住地区、「ドブクロ」、「食物」ー在日朝鮮人の食生活、「衣服」ー和服強制の中で、「お産」ーハルモニたちのお産、「冠婚葬祭」、「在日朝鮮人と娯楽」です。解説本が刊行されています。

関連して12月6日に「朝鮮民謡と生マッコリを楽しむ会」が開かれました。企画展「在日のくらし」の解説トークとともに、ロックやブルース・ボサノバなど幅広い分野で活躍するシンガーソングライター、プー・カンゲン（夫赶寛）さんによるオリジナルアリランや朝鮮民謡などのライブもありました。

Tel&Fax:03-3750-1808

<http://www.showanokurashi.com/>

奈良県戦争体験文庫

「奈良県戦争体験文庫 in 東京日本橋 2009」が奈良まほろば館で2009年8月4日～20日の会期により開催されました。

戦争体験文庫とは、全国の方がたから寄贈された戦中・戦後の体験に関する記録資料群で、現在約5万点を図書情報館で所蔵・公開しています。戦争体験文庫の2009年度の展示は、「戦争と食べもの」がテーマで、太平洋戦争期の食べものを紹介しています。1938年に国家総動員法が定められて以降、政府は米の統制を強めました。奈良県は、「戦地を偲んで二割の節米」の標語を掲げ、節米運動を展開しました。1941年4月には、米の配給制が実施されました。配給される米は、大人1人あたり1日に2合3勺と定められ、それぞれの家庭に米穀通帳が配られました。戦時中に、野菜は不足しており、自給自足が呼びかけられました。空き地を利用して、トマト、ダイコン、トウモロコシなどを作ることが奨励されました。また野菜の完全消費が掲げられ、皮、種、枯れ葉、へたまでも食べるようになりました。1940年に砂糖が配給制になったのを初めに、塩、味噌、醤油など調味料も配給制になりました。戦局が悪化すると、配給の遅配、減配が増え、玉子の代用としてメリケン粉で作るかに玉、カラス麦と黒豆で作る代用コーヒーが紹介されました。また、廃物にしていた食べ残しの魚の頭や骨でふりかけを作るなど、食生活の無駄をなくす工夫が実践されました。日本は戦後も食糧の配給制は続いていました。食糧配給公団の奈良県支局は、「コーンミールのおいしい食べ方を御存知ですか」と案内したパンフレットを作成し、アメリカから輸入したコーンミールの調理法を広め、食糧の配給不足を補っていました。

テーマと主な展示品は、「米の配給と供出」では、米の配給・戦時中の米・米の調理、米の供出・奈良県の農村・戦時中の肥料、「野菜」では、サツマイモの増産・戦時農園講義録・戦時中のトマトの栽培、「調味料」では、調味料の配給・酒の配給・戦時中の食生活の工夫、「戦後の配給」では、牛乳の配給・コーンミールの配給などです。展示資料リストを作成しています。

<http://www.library.pref.nara.jp/sentai/gallery.html>

日本大学文理学部：東京・世田谷区

学術展「江戸・東京発達史—その変遷と災害」、
「日中戦争写真展—中国人民日報社提供」、「ノモンハン事件展」、「熊猫(パンダ)展」が百周年記念館で2009年12月5日～24日の会期により開催されました。

「江戸・東京発達史—その変遷と災害」では、大ホールの壁面に江戸の創設から現代までの地図を中心にする通史展示がありました。戦争については大東亜共栄圏の地図、戦陣訓、慰問絵葉書、戦争中の新聞、空襲を伝えるグラフ雑誌、戦災地図などを展示していました。大ホールの床には、戦災復興院の地図など、近代のはじめから現代までの7つの時期の地図や空中写真を、縮尺2500分の1に拡大して、東京区部全域を貼り合わせて置いていました。ギャラリーでは東京の下町や山手の大空襲の直前と直後の空中写真を、平塚市博物館蔵の焼夷弾の実物とともに展示していました。2階ではアメリカ軍が空中撮影した東京以外の都市の空襲前後の写真や松代大本営予定地の地下壕の写真を展示していました。

「日中戦争写真展」では中国人民日報社が提供した写真を展示していました。「ノモンハン事件展」では清水哲朗さんが提供した事件当時や現在のノモンハンの写真、平和祈念展示資料館提供の満州事変などの関係資料、中国ノモンハン戦争研究所やモンゴル国防科学研究所などの提供による解説パネルなどを展示していました。
<http://www.chs.nihon-u.ac.jp/>

調布市郷土博物館：東京

平和の礎展 2009「掩体壕 発掘!—調布・ロタコ・百里原の調査を中心に」が調布市文化会館たづくり 2階南ギャラリーで 2009 年 8 月 8 日～16 日の会期により開催されました。陸軍の調布飛行場、立川航空廠の秘諾飛行場として建設中だったロタコ（御勅使河原飛行場）、海軍航空隊百里原基地の発掘調査により明らかになった掩体壕の実態を紹介するとともに、調布飛行場の歴史を振り返り、平和の尊さを改めて考えてみる展示でした。

また、平和展「高校生たちが見た東京の空襲被災樹木展」が調布市文化会館たづくり 11 階みんなの広場で 2009 年 8 月 7 日～16 日の会期により開催されました。東京には空襲を生き延びたたくさんの被災樹木が残っています。東京大空襲・戦災資料センターの協力により、都立芝商業高等学校の生徒たちが、それらの被災樹木を訪れ、作成した個性豊かなレポート約 50 点を展示しました。調布市に残る被災樹木の写真も展示しました。

Tel:042-481-7656 Fax:042-481-7655
<http://www.city.chofu.tokyo.jp/www/content/s/1176118850606/index.html>

東村山ふるさと歴史館：東京

特別展「全生園の 100 年と東村山」が 2009 年 9 月 19 日～12 月 6 日の会期により開催されました。全生園はハンセン病の療養施設、連合府県立全生病院として 1909 年 9 月 28 日開院し、途中、国立療養所多磨全生園と名を変え、現在に至っています。2009 年はちょうど設立 100 年の節目にあたります。これを機に、地元である東村山とのかかわりを中心に、設置反対の騒擾事件や、全生分教室を中心とした教育面での東村山とのかかわりの歴史、全生座歌舞伎、農産物品評会、公民館とのかかわり、人権の森などについて写真や資料の展示をしたものです。図録を刊行しています。

Tel:042-396-3800 Fax:042-396-7600
<http://www.city.higashimurayama.tokyo.jp/~kakupaweb/052000/>

東大和市立郷土資料館：東京

「多摩の戦跡写真パネル展」が 1 階エントランスロビーで、2009 年 8 月 1 日～30 日の会期で開催されました。戦争中の軍事施設の一部や、空襲の傷跡が、多摩地域のあちこちに今でも残されています。戦争の惨禍を伝える場所を 70 枚余りの写真で紹介していました。

Tel : 042-567-4800 Fax:042-567-4166
<http://www.city.higashiyamato.lg.jp/24,0,297.html>

町田市立国際版画美術館：東京

常設展「戦争と版画家—オットー・ディックスと北岡文雄」が常設展示室と企画展示室 2 で 2009 年 6 月 24 日～9 月 23 日の会期により開催されました。第 1 次世界大戦の強烈な従軍体験を描いたドイツの画家ディックス（1891-1969）と、第 2 次世界大戦直後の満州からの引き揚げを描いた北岡文雄（1918-2007）の版画作品などを展示していました。

企画展「生誕 100 年 小野忠重展—昭和の自画像」が企画展示室で 2009 年 10 月 3 日～11 月 23 日の会期により開催されました。小野忠重（1909-90）の作品には人間社会のドラマがあり、詩情がただよっています。しかしその表現は、情緒的であるとはいえません。それは、小野が庶民の感情や実生活を冷静に見つめ、社会の現実感を絵に表しているからです。さらに小野は、そうした作品のなかに、自分の内にそなわる庶民感覚やロマンティシズム、さらに社会批判の眼や狂気までも表しています。昭和をまるごと生きた小野の眼から生まれたこうした作品は、まさしく普遍的な意味での昭和の自画像といえるでしょう。一方、小野は戦前より版画史の研究に着手し、戦後になってさらに本格に取り組むようになります。埋もれていた江戸や明治、中国などの版画資料を発掘して著した本や、日本の近代版画史に関する多くの著作は資料的価値が高く、今でも定評があります。2009 年は小野忠重の生誕 100 年にあたります。これを記念して、企画展では小野の代表作約 130 点に加えて、小野と関係の深かった版画家の作品約 40 点、そのほかに小野の著書や資料などを展示していました。

Tel : 042-726-2771 Fax:042-726-2840

<http://www.city.machida.tokyo.jp/shisetsu/cul/cul01hanga/>

日本新聞博物館：神奈川・横浜市

展覧会「ようこそ『ひろしま国』へーボくらがつくる平和な世界」が2階企画展示室で2009年8月1日～9月23日の会期により開催されました。10代の子どもたちがテーマを考え、取材・執筆して作る平和新聞「ひろしま国」。中国新聞紙上で2007年1月に創刊され、2009年5月に50号を迎えたのを機に、これまでの取り組みを紙面や写真、関連資料などで振り返るものです。戦争だけでなく、食糧・貧困問題や環境などテーマは幅広く、次代を担う若者に「平和のために自分は何ができるか」を考えてもらい、平和を希求する心を育て広げる機会とするために開催されました。

Tel : 045-661-2040 Fax:045-661-2029

<http://newspark.jp/newspark/greeting/index.html>

石川県立歴史博物館：金沢市

企画展示「戦争の記憶」が2棟第4展示室で2009年7月18日～9月13日の会期により開催されました。戦時下のようすや戦争に対する思いを直接聞いたり、伝えることきわめて難しくなっています。モノ・文献・映像は『戦争の記憶』をたどる貴重な資料です。所蔵の軍隊や戦争関係資料から「戦争の時代」がどのように記憶されてきたかを展示・紹介するものでした。

1. 「モノが物語る戦争」では、陶製手榴弾・石川県工芸指導所所長の高橋勇がデザインしたモノ、海防艦模型、防空用レコードなどを、2. 「前戦の記憶」では、飯ごう、水筒、バンド、巻脚絆・脛宛ての脚絆、双眼鏡、神風はちまきなどを、3. 「銃後の記憶」では、伝単(日本の皆様)、防空用電球、灯火カバー2種、鉄かぶと、竹製シャベル、パン焼き器、女子勤労挺身隊の賞状、勤労奉仕感謝状、警防団写真帳などを、4. 「戦争の記録と記憶」では、勲章、支那事変における戦闘詳報、歩兵第7連隊写真帳2種、歩兵第7連隊史・手記・体験記などを、それぞれ展示し、兵士の写真も展示していました。

Tel : 076-262-3236 Fax:076-262-1836

<http://www.pref.ishikawa.jp/muse/rekihaku/>

岐阜市平和資料室：岐阜

「子どもたちに伝える平和のための資料展」が2009年7月18日～8月2日の会期により開催されました。岐阜市内20か所の戦争遺跡を写真・解説・地図を入れたパネルで展示していました。そのほとんどが空襲関係で、焼けた木6点、焼けた建物2点、傷ついた建物1点、傷ついた石造物6点、戦災者追悼碑・塔・像3点、防空壕1点、戦没者慰霊塔1点となっています。パネルの内容を入れたリーフレット型の図録を友の会が編集・発行しています。

Tel : 058-268-1050

柳津歴史民俗資料室：岐阜市

「戦時下のポスター」展が2009年7月28日～8月30日の会期により開催されました。戦時下のポスター16点は川合村に張られたもので、痛んでいます。「兵士と家族」にかかわるものですが、背後には不安と悲しみがあります。傷痕軍人・出征兵士の家族・遺族への援護をうったえたものが多く、8点です。内訳は、兵士になるための健康・体力4点、兵士としての覚悟1点、応召者商工者の店への感謝1点、航空日(アメリカ本土の都市を爆撃せよ、少年飛行兵応募)2点です。張り紙は独ソ戦開戦と、8月15日のラジオを聞けの2点です。ステッカーは3点で、銃後の儉約・労働に関するものです。海軍生活漫画絵葉書は1組でした。他に 戦意高揚の木目込み人形は、健康日本、一億の底力、守れ大空の3点でした。岐阜市の写真、戦死した従軍看護婦の遺骨帰還・68連隊の凱旋・応召兵の門出の3点も展示していました。

Tel:058-270-1080

<http://www.city.gifu.lg.jp/c/40120461/40120461.html>

静岡平和資料センター：静岡市

企画展「インパール戦 体験画」展が2009年12月4日～2010年3月28日の会期で開催されています。生き残った兵士、望月耕一さんの従軍体験画と手記30点を展示しています。

「戦争体験を聞くつどい」がアイセル21の4階研修室で2009年8月30日に開催されました。佐久間正治さん、桑原政江さん、高木孝義さんが話しました。

Tel&Fax:054-271-9004

<http://homepage2.nifty.com/shizuoka-heiwa/>

浜松復興記念館：静岡

「懐かしい昭和の風景展—夢・希望・未来を見つめた日々」が2009年8月7日～16日の会期で開かれました。昭和を伝えるおもちゃや看板などを展示しました。

Tel&Fax:053-455-0815

<http://www.hamahall.com/modules/hamal/>

沼津市明治史料館：静岡

戦争史跡めぐりが戦争と平和について考えるために、2009年8月6・8・15日の3回開かれました。

「戦時中の暮らしを体験しよう」という企画が2009年8月7日に小学4～6年生を対象に開かれ、戦争体験者の話を聞いたり、「すいとん」を作って食べました。

Tel:055-923-3335 Fax:055-925-3018

<http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/sisetu/meiji/index.htm>

名古屋市見晴台考古資料館：愛知

常設展「みはらしたいの戦争と平和」が2009年6月24日～9月13日の会期により開催されました。見晴台遺跡の弥生時代環濠集落、高射砲陣地に関連した資料に基づき、弥生時代や近代の戦いについて考えるものでした。主な展示品は、見晴台高射砲陣地については、出土した遺構や砲台・通信所・通信ケーブル線・兵舎・戦後の廃棄穴・観測兵器用掩・電波標定施設などの写真と、工具・高射砲の一部・銃剣・食器・ボタン・操砲用弾薬筒・B29尾翼の一部・焼夷弾などの出土した遺物でした。名古屋市内の他の遺跡から出土した遺物については、名古屋城三の丸の名古屋陸軍病院・輜重兵第3連隊関係では焼却炉・馬具・灰皿・食器・記章・ペン先・薬瓶・花瓶などを、名古屋城二の丸の歩兵第6

連隊関係では食器などを、津賀田古墳ではM50焼夷弾などを、防空壕では焼け土や被災品などを、それぞれ展示していました。名古屋中心部の空襲前と空襲後の空中写真も展示しています。

Telx:052-823-3200 Fax:052-823-3223

http://www.city.nagoya.jp/kurashi/shisetsu/toshokan/bi_jyutukan/nagoya00011160.html

浅井歴史民俗資料館：滋賀・長浜市

第7回終戦記念展「銃後のくらしと女性たち」が、2009年7月23日～9月6日の会期により開催されました。太平洋戦争では戦況の悪化とともに、女性や青少年が戦争に組織的に動員され、一部が前線に送られたほか、多くは「愛国婦人会」「大日本国防婦人会」などに組織され、勤労奉仕や、慰問袋の制作、金属徴用作業など、後方支援を担わされました。

戦争に行った兵隊も苦労しましたが、内地に残った女性たちも想像を絶する苦難を受けました。たった一週間の結婚生活、海軍入隊した兄2人、ハルマヘラ島からの帰還、あれから64年—8月15日終戦の日を迎えて、戦場にいった4人の兄などの湖北の女性たちの生々しい声をパネルにしています。

主な展示品は、嫁入り道具・タンス・着物・枕・傘・提灯、陰膳、軍帽、戦地からの最後の手紙、村葬関係資料、海軍軍帽・セーラー服、徴兵検査合格通知、海軍志願兵・予科練募集ポスター、うちわ、ラッパ、マント、軍帽、水筒、飯ごう、鉄帽、出征餞別控張、DDT噴霧器、軍事郵便、召集令状、回覧板、配給簿、配給所看板、灯火管制電気の笠、防毒面、布製バケツ、安全非常袋、モンペ、国防婦人会たすき、竹槍、婦人会人形、処女会会則と感謝状、国防婦人会会則綴、愛国婦人会委嘱状、衣料切符、陶製アイロン・マッチ・豆煎り、米ぬか石けん、教科書、クレヨン、愛国百人一首解説本、千人針、慰問袋、慰問の手紙・絵葉書、慰問誌「湖郷の便り」、国民総動員健康週間や松根油のポスター、週刊朝日、サンデー毎日などです。

関連して、「子ども体験教室—戦時中のお話を聞こう」があざい歴史の会員を講師として七りん館で2009年7月25日に開かれ、戦時の食事「汁団子」を試食もしました。

Tel:0749-74-0101

<http://www.city.nagahama.shiga.jp/index/000012/002487.html>

近江八幡市立資料館：滋賀

テーマ展「平和への祈り」④が旧伴家住宅で2009年7月11日～8月16日の会期により開催されました。主な展示資料は、日露戦争関係資料、1917年の特別大演習関係資料、軍服外套・傷痍軍人白衣・日の丸寄せ書き・出征ののぼり、軍帽・鉄帽・巻脚絆・水筒・弁当箱・弾薬ごう・図のう・背のう・雑のう・奉公袋・千人針のチョッキ、子ども用国民服、疎開学童にメロンをふるまった天郷の額、画報躍進の日本・国防婦人会たすき・国防婦人会絵葉書、防空頭巾・陶製消火弾・防毒面、信楽焼きの陶製手榴弾・木銃、母からの軍事郵便、飯ごう・銃剣術の絵葉書・教練の絵葉書・教練用の手榴弾などと、出征や1944年の結婚式などの写真です。戦時中の体験文集を刊行しています。

Tel:0748-32-7048 Fax:0748-32-7051

http://www.city.omihachiman.shiga.jp/contents_detail.php?co=kak&frmId=823

野洲市歴史民俗博物館：滋賀

夏期テーマ展「女性史の発見ー資料から見た女性とくらし」が2階企画展示室の一部を使って2009年7月18日～8月30日の会期により開催されました。考古・歴史・民俗の3つの分野の資料から、女性の歴史やくらしを考えるものでした。高木婦人会が事業としてつくった千人針、竹槍訓練の写真も展示していました。展示資料リスト付き解説資料を作成しています。

Tel:077-587-4410 Fax:077-587-4413

<http://www.city.yasu.lg.jp/doc/kyouikubu/hakubutukan/20071219c.html>

栗東歴史民俗博物館：滋賀

ロビー展示「平和のいしずえ 2009」が2009年8月1日～8月16日の会期により開催されました。栗東歴史民俗博物館では、栗東市の「心をつなぐふるさと」平和都市宣言をうけて、1990年度から戦争と平和をテーマとする「平和のいしずえ」展を毎年開催してきました。これは市

内外の所蔵者より提供された資料を通じ、近代以降の戦争の歴史と戦時下の生活を再現することで、地域の視点から平和について考えようとするものです。

2009年は夏期展示室休室のため、館内のロビーで、アジア・太平洋戦争の概要、市民生活、滋賀県下での空襲被害などの解説パネルと、大日本国防婦人会襷、国防婦人会治田村分会会旗竿頭、大日本国防婦人会名誉国旗納入箱、陶器製湯たんぼ、紙製洗面器、代用品の蝋燭、木製コマ、防毒面、レコード「日章旗の下に」、レコード「日本陸軍」、清軍軍衣、モーゼルなどの収蔵資料を展示していました。

スポット展示「海軍軍衣ー栗東に残る日清戦争が、2009年8月1日～30日の会期により開催されました。日清戦争後、滋賀県が県下の神社に戦利品として下附した清軍の軍衣とモーゼル銃を展示していました。

Tel:077-554-2733 Fax:077-554-2755

<http://www2.city.ritto.shiga.jp/hakubutsukan>

向日市文化資料館：京都

夏のラウンジ展示「くらしのなかの戦争」が2009年8月15日～9月23日の会期により開催されました。勤労奉仕と食料増産をテーマに、出征兵士の留守宅へ手伝いに行ったり、戦中・戦後の作物供出に奔走した人びとの姿を、身近な地域の資料や写真で紹介していました。その他、「昭和20年 供出割当簿」「昭和25年 米供出明細書」「昭和25年 供出完遂記念一升マス」なども展示していました。

Tel:075-931-1182 Fax:075-931-1121

<http://www.city.muko.kyoto.jp/shisetsu/shiryokan.html>

大山崎町歴史資料館：京都

「平和のいしずえ展」が2009年8月11日～23日の会期により開催されました。今年は、明治期特に日露戦争の雑誌、旧役場文書などを展示して、当時の戦争の実態を、アジア・太平洋戦争との比較を念頭において展示していました。比較は兵器・捕虜・マスコミなどについておこ

ない、特に日露戦争では日本人が捕虜になることを非難していないことを強調していました。

旧役場文書では、1. 官庁令達綴(1886年、乙訓郡役所から連合戸長あての陸軍省による諸兵非常召集の通達) 2. 上司進達綴(1905年、大山崎村長から郡長あての軍人家族救済扶助状況報告で、困難者に尚武会から1人1か月1円寄付していることも書かれている) 3. 上司進達綴(1922年、佐賀県武雄町の者が京都の徴兵検査署で検査をうけたが、大山崎村が大山崎の寺に泊め、帰りの交通費も支給していることも書かれている)などを展示し、他に女学校すごろく(1909年)、旅順包囲攻撃図(1904年7月4日)、日露戦争実記18冊、満州写真帳(1925年、日本式神社・旅順戦跡など掲載)、写真通信1921年11月号、満州駐屯記念写真帳(1929・1930年頃、1929年秋季演習の写真など掲載)、上海事変記念大写真帳(1932年、陸戦隊の写真など掲載)も展示していました。

Tel : 075-952-6288

http://www.kiis.or.jp/rekishiki/kyoto/yamaza_ki2.html

京の田舎民具資料館 : 京都市

「戦争中の暮らし展」が2009年8月30日までの会期で開催されました。同館は元小学校教諭の竹谷誠一さんが、歴史を伝える農具や日用品などの実物に触れる場を提供するため22年前に開いたものです。戦争をテーマにした企画は1995年に続き2度目です。第2次世界大戦当時の生活用品や小物を展示し、戦争への流れが教育や日常生活の中で作られることを伝えようとしたものです。地域住民にも配られていた教育勅語の書状や鉄の代わりに使われた陶製のボタン、民間人に配られた鉄かぶとなどが展示されました。

Tel : 075-581-2302

大阪国際平和センター (ピースおおさか) : 大阪市

特別展「戦争と学校—教室から消えた自由」が1階特別展示室で2009年10月6日～2010年2月21日の会期で開催されています。日中戦争から太平洋戦争にかけて、学校では授業に戦争

の色が濃くなり、末期になると小学生は空襲を逃れて疎開し、中学生は軍需工場で働き、大学生は学徒出陣で戦場に向かいました。戦争により学校からどのように自由がなくなっていたのか、子どもや青年たちはどんな生活をおくり、どのような気持ちでいたのか、当時の写真や資料で明らかにし、戦争と平和の意味について考えるものです。国民学校、旧制中学校、高等女学校などが次第に戦争に巻き込まれていくようすを説明する写真・文字パネル約80点と奉安庫、国民学校制服、慰問袋など現物資料約50点を展示しています。

8. 15 終戦の日 平和祈念事業「講演会と歌で検証する戦争と平和」が1階講堂で2009年8月8日に開かれました。終戦の日から60年余りが経過し、世界のグローバル化により国際的な人の移動が拡大し、それに伴い外国に定住して数世代を経過した後、かつての母国である日本に帰還して就労、定住するという「帰還移民」の現象が発生しています。日系ブラジル人や日系フィリピン人、中国帰国者の2世、3世のかかえる課題を明らかにする中で、今、われわれに何ができ、何をしなければならないのかということに思いをいたし、あらためて戦争の愚かしさと平和の尊さについて考える機会とするために開かれました。ナビゲーターはまず唱平さんでした。九州大学アジア総合政策センター・センター長の大野俊さんが「アジア日系“帰還”移民と戦争」と題して講演しました。「歌で検証する戦争と平和」では、1945年8月15日に東海林太郎や小笠原美都子が歌った流行歌(赤城の子守唄から十三夜)を高橋樺子さんが歌いました。ピアノ伴奏は田中裕子さんでした。

12・8 開戦の日 平和祈念事業「銃のあとさき」が1階講堂で2009年12月6日に開かれました。2009年4月、プラハでのオバマ大統領の演説は、核兵器の廃絶が人類究極の目標であることをあらためて全世界に宣言するものでしたが、一方で、テロや内戦など多種多様な紛争により、今この瞬間も多くの人命が命を落とし、傷ついています。これらの紛争で使われているのはもちろん、核兵器ではなく通常兵器と呼ばれるもので、その中でも特に小さな銃であることが多いのです。このような“小さな銃の大きな被害”についてわれわれは無知であっていいのでしょうか。銃にまつわる人びとの想いを、講演と歌

で検証することにより、あらためて戦争の愚かしさと平和の尊さについて考える機会とするものでした。ナビゲーターはもず唱平さんでした。帝京大学文学部史学科教授の影山好一郎さんが「戦いに学ぶ」と題して講演しました。「歌で検証する戦争と平和」では「もずが枯れ木で」を高橋樺子さんが歌いました。ピアノ伴奏は田中裕子さんでした。

8月の「ウィークエンド・シネマ」が1階講堂で2009年8月1・15・22・29日に開かれ、「火垂るの墓」が上映されました。1945年の神戸空襲で母親を失って、2人きりになってしまった兄妹、一度は親戚の家に世話になるがなじめず、2人は近くにある山の横穴での生活を始め、楽しくスタートしたのもつかの間、妹の死という悲劇を迎えるという物語です。

9月の「ウィークエンド・シネマ」が1階講堂で2009年9月5・12・19・26日に開かれ、「人間の翼 最後のキャッチボール」が上映されました。名古屋軍（現 中日ドラゴンズ）のエースピッチャーとして活躍していた石丸進一は、1945年5月、神風特別攻撃隊員となり、大空に消えたという話で、この映画は、戦争の時代に、野球を愛し続けた若者の魂のメッセージです。

10月の「ウィークエンド・シネマ」が1階講堂で2009年10月3・10・17・24日に開かれ、「亀も空を飛ぶ」が上映されました。2003年、戦乱のイラク北部で、難民の少女、盲目の赤ん坊や両腕のない子どもたちが生き抜くたくましさ、決して癒すことのできない傷を負った悲しさを、マジック・リアリズムの手法で描く作品です。

11月の「ウィークエンド・シネマ」が1階講堂で2009年11月7・14・21・28日に開かれ、「禁じられた遊び」が上映されました。第2次世界大戦中のフランスで、11歳と5歳の少年少女が十字架を盗んではお墓をつくるという遊びをくりかえしていたという物語で、子どもの無邪気さを通して戦争の恐ろしさを告発した作品です。

12月の「ウィークエンド・シネマ」が1階講堂で2009年12月19・26日に開かれ、フランスのジャン・ボイヤール監督の「ドキュメンタリー 太平洋戦争」が上映されました。太平洋戦争の全期間の戦闘を、当時貴重だったカラー映像でつづるもので、日本初出の珍しい映像が

決定的瞬間を見せ、生々しい戦場の臨場感がよみがえってくるものでした。

教員のための「平和学習」講座が開かれました。第1回は2009年8月7日に開かれ、講義「平和の視点—ピースおおさかでの体験」とフィールドワーク「大阪城公園内に残る戦跡を歩く」がありました。第2回は8月8日に開かれ、8・15 終戦の日 平和祈念事業「講演会と歌で検証する戦争と平和」に参加しました。

Tel:06-6947-7208 Fax:06-6943-6080

<http://www.peace-osaka.or.jp/>

堺市立平和と人権資料館：大阪

写真パネル展「学童疎開」が2009年9月1日～11月1日の会期で開催されました。疎開した子どもたちの様子を写した22枚のパネルと8枚の解説パネルで学童疎開の概要を伝えるものでした。

企画展示「地雷」が2009年11月17日～12月27日の会期で開催されました。世界には、まだ1億個以上の地雷が埋められているといわれています。そして、今この瞬間にも多くの人びとがその被害を受けています。今回は人道目的の地雷除去支援の会（JAHD S）提供による関係写真パネルとさまざまな種類の地雷模型を展示し、地雷の恐ろしさを通して、平和の尊さを訴えるものでした。

特別展「地球の上に生きる—DAYS JAPAN フォトジャーナリズム写真展」が教育文化センター図書館棟1階の小ギャラリーで2009年10月7日～16日の会期により開催されました。世界50か国から寄せられた作品から選ばれた2008・2009年度DAYS国際フォトジャーナリズム大賞受賞作品約40点を展示し、戦争・災害・環境汚染など、地球の真実の姿を伝えるものでした。これら世界のフォトジャーナリストたちの作品を通じて、人間と地球が抱える問題、世界が変わり続ける中で繰り返される悲劇と絶望について見つめなおし、今、私たちができることについて考える機会とするものでした。

関連して映画上映会が教育文化センター図書館棟1階集会室で2009年10月10日に開かれ、「父と暮らせば」が上映されました。これは原爆が投下されてから3年後の広島、図書館に勤める美津江の前に、1人の青年が現れた、その

青年に好意を示され、美津江も一目で彼に魅かれていく、しかし、愛する人びとを原爆で失い、自分が生き残ったことへの負い目を感じている美津江は、自分の恋心を押さえつけようとしていた、そんなとき、父の竹造（幽霊）が現れる…という広島原爆を背景に描く、父と娘の物語です。

同じく10月11日の映画上映会は教育文化センター図書館棟1階研修室1で開かれ、「サラエボの花」が上映されました。これは、第2次世界大戦後のヨーロッパで最悪の紛争となったボスニア・ヘルツェゴヴィナの内戦によってもたらされた深い爪痕に苦しむ母娘の再生と希望の物語を描くドラマで、父親が殉教者であることを誇りに思っている少女サラはクラスメイトから「戦死者リストに父親の名前が無い」とからかわれ、母は隠し続けてきた過去の秘密を話してしまう事に…という物語です。

Tel:072-270-8150 Fax:072-270-8159

http://www.city.sakai.osaka.jp/city/info/_jinken/

吹田市平和祈念資料室：大阪

企画展『「サダコと折り鶴」ポスター展』が2009年8月18日～30日の会期により開催されました。被爆による白血病で亡くなった佐々木禎子さんの生涯や、戦時下の子どもたちの生活などを紹介するものでした。関連して、8月の平和映画会は8月22・23・30日に開かれ「アニメ つるにのって」を上映しました。これは、夏休みに広島を訪れたとも子が、平和記念公園で出会った少女サダコと繰り広げる不思議な冒険物語です。

Tel&Fax:06-6387-2593

<http://www.city.suita.osaka.jp/home/soshiki/div-jichijinken/jinken/original/000338.html>

枚方市平和資料室：大阪

特別展「ヒロシマ・ナガサキ原爆パネル展」が2009年8月15日～20日の会期により開催されました。戦争の体験や記憶を風化させることなく次世代に伝えるために、原爆の投下を受けた広島と長崎の惨状を紹介するものでした。

枚方市平和資料室は枚方市立中央図書館の1階に2006年8月1日に開館したもので、普段の常設展では旧陸軍禁野火薬庫の大爆発の写真や軍服などを展示しています。

Tel:072-2841-1221 Fax:072-841-1700

大阪人権博物館(リパティおおさか)：大阪市

写真展「20世紀負の遺産 沖縄—大阪在住の写真家が向き合う沖縄戦」がガイダンスルーム2で2009年8月1日～30日の会期により開催されました。大阪在住の写真家・小西敏機さんが4年間をかけて沖縄戦の跡をたどりながら撮影した写真124点を展示しました。小西さんは、10年前から日本各地に遺された戦跡を調べ、2005年から沖縄の戦跡の撮影をはじめました。1945年3月から6月まで住民を巻き込んだ地上戦が繰り広げられた沖縄に、同じく3月から6月までの間滞在し、知人もいない沖縄の戦跡をまわり、そこで繰り広げられた光景を思いながら、物言わぬ風景にレンズを向けました。最初に訪ねた豊見城市の第2野戦病院跡の前で「信じられないほど無謀な戦争だった」と感じた印象は、撮影を重ねるたびに強くなっていきました。小西さんが撮影した沖縄の戦跡は、アメリカ軍が上陸した海、住民が追いつめられた崖、海軍陸戦隊司令部壕、避難壕、戦後につくられた慰霊碑、激戦地に建設されたアメリカ軍基地などで、そこに人の姿はありません。大阪から沖縄を訪ねて小西さんがレンズを通してみつめた100点を超える沖縄の戦跡は、大阪に住む人たちが沖縄、そして戦争とどのように向き合うのかを伝えるものでした。

第64回特別展「大阪の学校ものがたり—教育と地域」が特別展示室で2009年9月8日～10月12日の会期により開催されました。これは、大阪を中心に、学校の歴史とそこでの教育の取り組みを通して、人間形成や地域・社会全体にとって学校のもつ意味は何かを考えるものでした。展示概要は「学校教育のあゆみ」①近代の学校制度②教科書の編さん・教材の開発③女子教育と女学校④戦前の学校給食⑤貧困と教育、「教育を受ける権利」①日本国憲法と教育の義務化②障害児（者）教育と養護（支援）学校③教育権をめぐる動き、「同和教育と人権教育」①戦後不就学問題への直面②学力の保障と集団づ

くり③“国連人権教育の十年”前後、「民族教育と多文化共生」①植民地教育から朝鮮学校へ②民族の学舎③民族学級という経験④在日朝鮮人教育から多文化共生教育へ、「人間性を育む教育」①環境（E S Dと環境学習）②生命（H I Vと命の学習）③キャリア教育（職業体験と仕事）でした。

Tel:06-6561-5891 Fax:06-6561-5995

<http://www.liberty.or.jp/>

歴史館いずみさの：大阪

ホール展示「戦争・平和資料展」が2009年7月28日～8月30日の会期により開催されました。この「戦争・平和資料展」は1997年から毎年開催されているもので、学芸員実習生が企画・設営したものです。構成は、「くらしの中の戦争」「戦争とメディア」「戦場へ向かう兵士たち」でした。展示資料解説資料を作成していません。

Tel:072-469-7140 Fax:072-469-7141

<http://www.city.izumisano.osaka.jp/ka/rekishishi.html>

箕面市立郷土資料館：大阪

企画展示のコーナー「戦時生活資料展」が2009年8月7日～31日の会期により開催されました。館は1989年の開館以来、毎年夏に「戦時生活資料展」を、施設移転をした2006年は除いて、開催してきました。平和を願う思いは、毎年同じであり、永遠に変わるものではなく、また変えるべきものではありません。2009年も、平和の尊さを祈念するとともに、戦争の悲惨さを風化させないため、「戦時生活資料展」が開催されました。展示資料の多くは市民から寄贈されたもので、展示作業は博物館実習生が担当しました。日本の今の平和が続くとともに、世界中から戦争がなくなるという平和を願う気持ちが込められた展示会でした。

Tel:072-723-2235 Fax:072-724-9694

<http://www2.city.minoh.osaka.jp/KYUODO/>

姫路市平和資料館：兵庫

「非核平和展」が2階展示室で2009年7月17日～8月30日の会期により開催されました。「非核平和都市宣言」（1985年3月制定）に基づき、核兵器の廃絶と世界の恒久平和を願い、啓発のためにおこなった展示です。広島平和記念資料館・長崎原爆資料館所蔵の現物資料・写真パネルの展示や市内小・中・高校生の絵画・書道、県立姫路工業高校デザイン科生徒の作品を展示していました。

関連して2009年8月2日に「平和を共に歌う合唱コンサート」が開かれ、姫路市児童合唱団による合唱コンサートがありました。2009年8月9日には「被爆体験談を聞く会」が開かれ、「姫路市被爆者の会」の菅原修さんが話しました。

「市立中学校平和展」が2009年9月12日～27日の会期により開催されました。市立中学校の生徒が作成した夏休み課題作品などを展示していました。

秋季企画展「姫路空襲とその復興」が2階展示室で2009年10月3日～12月23日の会期により開催されました。2度の姫路空襲について「米軍作戦任務報告書」や「記録・証言」などで紹介し、戦後の復興事業の足跡を写真パネルや現物資料で展示して、戦争の惨禍と平和の尊さを考えるものでした。全国戦災都市連盟結成とその経緯や全国戦災都市空爆死没者慰霊塔の建立についても展示していました。

関連して「姫路空襲体験談を聞く会」が2009年10月31日に開かれ、石本鉄治さんと黒田権大さんが対談しました。

Tel:0792-91-2525 Fax:0792-91-2526

<http://www.city.himeji.hyogo.jp/heiwasisryo/>

柿衛文庫：兵庫・伊丹市

小企画展「戦時下の絵手紙」が2009年7月25日～9月23日の会期により開催されました。日本画家前田美千雄が戦地や兵舎から妻や家族に宛てた葉書絵900枚などが2003年に寄贈されました。葉書絵は日常の風景や草花を描いたものが多く、妻や家族への心遣いと愛情に満ちています。今回はフィリピンから、1945年8月に消息を絶つまでのものを初めて展示しています。

以前の展示会では、中国戦線からのものと、粟崎からのものを展示しましたが、今回はこれらの一部も展示しています。他に、戦時下の俳人の作品も展示しました。展示資料を翻刻した冊子を作成しています。

Tel:072-782-0244

<http://www.kakimori.jp/>

奈良県立図書情報館：奈良市

戦争体験文庫企画展示「戦争と食べもの 3 調味料」が 2009 年 10 月 1 日～12 月 27 日の会期により開催されました。第 3 回目の本展示は、「調味料」と題し、調味料の配給制、家庭における調味料の使用の実態を取り上げていました。1940 年に砂糖が配給制になったのを皮切りに、1941 年に油、1942 年に塩、味噌、醤油などが配給制となりました。配給制によって、調味料は切符がないと買うことが出来なくなりました。砂糖の配給量を抑えるため、「砂糖の過食は弱い子を作る」など調味料の使用を抑える宣伝が繰り返されました。配給は町村長の定める地区によりました。配給業者は配給のつど、通帳に配給量の記入、捺印をするなど注意が細かく定められていました。配給は戦況が悪化するに伴い減配や遅配が多くなっていきました。配給の不足を補うため、各家庭において調味料を作ることが紹介されました。酢は落ちていたり、虫がついて腐り始めた柿などから作られました。醤油を補うためにきな粉の汁が利用され、味醂の代用として山葡萄の汁が紹介され、これは国策調味料と位置づけられました。また、戦前から使用されていた味の素、ケチャップ、マヨネーズ、カレー粉などの代用品の作り方が紹介されており、戦争が調味料の利用に与えた影響が窺えます。

主な展示資料は、家庭用塩購入票・家庭用味噌醤油購入通帳・配給控帳・アルソ撒大豆醤油醸造法・アルソ撒大豆淡口醤油醸造法・統制下の調味料と食料品の作り方などです。

Tel:0742-34-2111 Fax:0742-34-2777

<http://www.library.pref.nara.jp/sentai/gallery.html>

備前市歴史民俗資料館：岡山

第 38 回企画展「なぎさの記憶・瀬戸内の太平洋戦争」が 2009 年 7 月 4 日～8 月 23 日の会期により開催されました。戦艦大和を建造した呉や岡山空襲関係の資料、備前市の当時の古写真など、戦時中の瀬戸内海域の暮らしをテーマに資料や写真を展示していました。

Tel&Fax:0869-64-4428

<http://www13.ocn.ne.jp/~rekishi/>

広島平和記念資料館：広島市

2009 年度 第 1 回 企画展「佐々木雄一郎写真展 第一部 平和を築く」が東館地下 1 階展示室で 2009 年 7 月 18 日～12 月 15 日の会期により開催されました。展示構成は、「はじめに」「ヒロシマの子どもたち」「変わり果てた故郷」「肉親を失う、街が消えた、焼け跡に生きる「都市の再建」橋と道路、新しい建物、建設の遅れ」「平和の象徴」平和記念公園、平和記念資料館、平和大通り「復興の光と影」繁華街の復活、食糧・物資の不足、住居をめぐる問題「ヒロシマの残像」「おわりに」です。

Tel:082-241-4004 Fax:082-542-7941

<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/>

三良坂平和美術館：広島

特別企画展「明日への輝き 24 回平和展」が 2009 年 7 月 25 日～8 月 23 日の会期により開催されました。作家たちが作品に込めた平和の願いを感じとり、平和の尊さを心に刻むために開かれたものです。

Tel:0824-44-3214

<http://www.hiroshimarekiminkyo.com/mirasakaheiw.html>

福山市しんいち歴史民俗博物館：広島

企画展「戦争と民衆」が 2009 年 7 月 7 日～9 月 6 日の会期により開催されました。町内の戦争の跡を後世に伝え、戦闘に参加したくないにかかわらず、お互いが加害者であり被害者の立場であった「外への戦い」と「内なる戦い」を掘り起こし平和への願いを強く伝えるものでし

た。趣旨と主な展示資料を掲載した解説資料を作成しています。

Tel:0847-52-2992

<http://www.hiroshimarekiminkyō.com/shinichirekimin.html>

高松平和記念室：香川

高松市戦争遺品展が高松市役所1階市民ホールで2009年7月27日～31日の会期により開催されました。「高松空襲」「西部ニューギニア戦線 玉砕の島写真」などを展示していました。

企画展「平和学習のために―戦時中の学校教育を中心に」が高松市市民文化センター1階ロビーで2009年8月21日～9月6日の会期により開催されました。

Tel:087-833-7722 Fax:087-861-7724

<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/1794.html>

多度津町立資料館：香川

「戦争資料展 2009 代用品の時代」が2009年8月1日～30日の会期により開催されました。日中戦争期の1939年頃から、政府はベンチ・街路灯・火鉢・家庭用の鉄製品等を回収しました。そのため、いろいろな代用品が作られました。資料展では、代用品を中心に、学童疎開関係資料、戦時下の生活用品、日露戦争期や太平洋戦争期の軍隊関係資料などを展示していました。多度津町立資料館は2003年から継続して戦争資料展を開催しています。

Tel:0877-33-3343

<http://www4.ocn.ne.jp/~t-kaikan/siryoul.html>

大牟田市直三池カルタ・歴史資料館：福岡

平和展「戦争と生活―子どもたちに伝えたい銃後の暮らし」が2009年6月7日～8月9日の会期により開催されました。戦時資料や戦前・戦中のカルタを展示し、多くの市民が戦争の悲惨さを知り、現在の平和な社会が戦時における多くの人びとの尊い犠牲の上に成り立っていることを理解し、平和を希求する意識の向上に役立てることを願い、開催している企画展です。

今回の「戦争と生活」の展示は、銃後の生活に焦点をあてており、今と戦時中の生活用品の違いを示した展示でした。

Tel&Fax:0944-53-8780

<http://三池カルタ・歴史.com/>

古賀市立歴史資料館：福岡

企画展2「平和に祈りを込めて―百のうた千の想い 甦る平和百人一首 原画展」が2009年11月3日～15日の会期により開催されました。1948年、新憲法記念事業として全国から応募された2万3720首の短歌より平和百人一首が選定されました。それらのうたは、戦後の喜び、新しい平和の国づくりへの希望や期待があふれており、全てのうたに稲田善樹さんの美しい挿絵が付いた復刻本が昨年出版されました。なお、この100人の中に当時古賀に住んでいた2人のうたも選定されています。戦後の喜びの込められたうたを読み、挿絵の原画を見る展示会でした。

Tel:092-940-2683 Fax:092-944-6215

http://www.lib-citykoga.org/museum/muse_top.html

長崎原爆資料館：長崎市

2009年度第2回企画展「原爆資料館所蔵絵画展」が地下2階企画展示室で2009年7月16日～9月30日の会期により開催されました。原爆資料館に所蔵されている「被爆者の描いた絵」など約40点を展示しました。被爆当時から60年以上を経ても、決して忘れてはならない事実、継承しなければならぬ記憶が表現された絵画です。これはNHKと共催して2002年に募集した「被爆者が描く原爆の絵」に寄せられた作品の一部を再展示したものです。

Tel:095-844-1231 Fax:095-846-5170

<http://www1.city.nagasaki.nagasaki.jp/na-bomb/museum/>

薩摩川内市川内歴史資料館：鹿児島

ミニ企画展「終戦記念展示」が2009年8月4日～23日の会期により開催されました。

Tel:0996-20-2344 Fax:0996-20-2848

<http://rekishi.sendai-net.jp/index2.htm>

沖縄県平和祈念資料館：糸満市

第10回 特別企画展「イクサユヌワラビ(戦世の子ども) 一戦時下の教育と子どもたち」が1階企画展示室で2009年10月10日～12月13日の会期により開催されました。沖縄戦前・戦中・戦後の教育、こどものたちの置かれた境遇について、調査・研究および聞き取り調査を実施し、展示することを通じて、戦時下の教育と苦難・犠牲を強いられたこどもたちの諸相への理解を深め、戦争の悲惨さや平和の尊さについて再考する契機を提供することを目的に開かれたものです。

県内の戦前・戦中・戦後の教育やこどもに関する資料や証言を展示していました。前史として、近代の教育を概観した上で、国民学校が発足したから沖縄戦までを主対象とし、最後にアメリカ軍占領下の教育にも触れています。展示構成は、教育勅語と奉安殿、国民学校と教科書、少国民と呼ばれたこどもたち、こどもの姿が消えた学校、駆り出された生徒・戦場のこどもたち、収容所からの学校再開です。

2009年度第3回子ども・プロセス企画展「沖縄から核の廃絶を求めて」が「ひろば・ゆいまーる」で2009年8月1日～9月10日の会期により開催されました。

Tel: 098-997-3844 Fax: 098-997-3947

<http://www.peace-museum.pref.okinawa.jp>

対馬丸記念館：沖縄県那覇市

第12回対馬丸記念会特別展「対馬丸と疎開—対馬丸の航跡と疎開資料展」が対馬丸記念館1階企画展示室で2009年10月4日～11月23日の会期により開催されました。

関連して當間栄安さんによる講話「対馬丸の航跡」が2009年10月4日にありました。

第13回対馬丸記念会特別展「世界の平和児童画展—対馬丸学童に捧ぐ」が対馬丸記念館1階企画展示室で2009年12月16日～2010年1月15日の会期により開催されました。

第13回対馬丸記念会ちやーがんじゅー講座、美ら島観光バスガイドの崎原真弓さんによる公

演「島人の肝心」が2009年12月6日に開かれました。

Tel: 098-941-3515 Fax: 098-863-3683

<http://www.tsushimamaru.or.jp/>

那覇市立壺屋焼物博物館：沖縄

「やきものにみる暮らしのなかの戦争」が3階企画展示室で2009年6月16日～28日の会期により開催されました。昭和10年代、長期化する戦争の中で軍需が優先され、人びとの暮らしから金属製品が不足することとなり、変わって陶磁器製の代用品が盛んに作られました。また、この頃のやきものには戦争協力の標語や国策の宣伝を文字、図案、形にしたものもあります。このような人びとの暮らしと戦争とのかかわりを、陶磁器製品を通して紹介することで、これからの平和な社会を希求する契機とすることを目的に開催していました。

Tel: 098-862-3761 Fax: 098-862-3762

<http://www.edu.city.naha.okinawa.jp/tsuboya/>

久米島自然文化センター：沖縄・久米島町

企画展「09 平和展」が特別展示室・講堂で2009年6月19日～26日の会期により開催されました。戦後64年を迎え、戦争の犠牲になった多くの霊を弔い、沖縄戦や久米島での住民虐殺などの歴史的教訓を正しく次世代の子ども達に伝え、命の尊さや平和の大切さを学ぶ企画展でした。センターで収蔵している戦争資料の他、各学校で取り組んでいる平和学習の取り組み状況を展示していました。

Tel: 098-896-7181 Fax: 098-896-7182

<http://www.town.kumejima.okinawa.jp/bunkacenter/index.html>

国際ネットワークニュース

ハラビヤ博物館：イラク

われわれの博物館は、サダム・フセイン前大統領が1988年3月16日に使った化学兵器によ

る 5000 人の犠牲者を追悼するために建てられた。人間として、博物館として、われわれは殺された人びとと共に、虐殺に使用された化学物質はこの国と世界中で戦争や復讐に必要なものであると考え、そのような虐殺を二度と繰り返さず、平和の理念を広げ、世界をもっと平和にするために全力を尽くすことを決めた。

われわれはこの虐殺以外に、イランのザルダシュト (Zardash) や日本のヒロシマ・ナガサキなどのような異なった場所で起こった他の虐殺に関する記念行事に参加したいと考えている。2009 年 8 月 6 日長崎で開催された会議にわれわれの市長も含めて 300 人の市長が集まった。2009 年 9 月にはテヘランのイラン平和博物館で会議を開催した。2008 年イラクのクルディスタンでの平和会議には政府や NGO の多くのメンバーが参加した。さらに全来館者のために平和のスローガンを掲げ、絶えず平和維持活動をおこなっているが、一日に約百人の訪問者がある。

われわれは世界の全平和維持者がメールだけではなく互いに訪問し、このプロセスのためにさらに熱心に活動する会議を開催するような関係を創ることを期待したい。

マハムード・ハマアミン
Mahmood Hama-Amin

博物館のメディア
博物館 e メール : halabjamonument@yahoo.com
web site: www.halabja-monument.net
電話 : 00964538

21 年後発見された少年 : イラク

1988 年 3 月 16 日、写真を運んでいた少年がハラビヤという町で化学爆弾に遭った。彼は生後 40 日で家族が殺され、化学物質の影響で意識がなくなった。その少年はイランの兵士に発見され、イランへ連れていかれ、イランのマサド市の女性に養育された。21 年後ハラジャ記念使節団がその少年をハラジャへ連れ帰り、化学爆弾で赤ん坊を失った非常に多くの家族が少年に会いに来て、DNA 鑑定の結果、その少年の本当の家族とその母親が発見された。母親は黒い服を着て彼の横にいて、名前が化学爆弾犠牲者として登録されていたのである。1988 年に行方不明となった少年の名前 (Zmnako) が被害者のな

かから消され、多くのハラジャの人々や化学被害者が参列するなかで盛大に記念式典がおこなわれた。

オランダ領東インド諸島 (インドネシア共和国の旧称) の禁止された写真集

出版 : 2009・12・8 1:52 Fediya Andina

この写真集の写真は、当時バタビア (現ジャカルタ) と呼ばれていた所にあったオランダ植民地政府によって出版が禁止されていた。理由はインドネシアにおけるオランダ植民地戦争の実態を現す写真であったからである。

12 月 8 日の今日、1945-1949 年の写真の本は、3 人の著者、Erik Somers, Rene Kok, Louis Zweers によって作られた。最新の 200 枚の写真は、未だオランダのメディアには出されなかった傷ついた兵士や、脅かされているインドネシア人の写真である。

この 3 人の著者はすでに長い間、さまざまな公文書の第二次大戦の写真を研究している。また、彼らは 1945-1949 年のインドネシア写真の膨大なコレクションも持っている。

多くの写真家は無視され、オランダ植民地政府のために働いていた。彼らはバタビアの権力者のために写真を譲渡せねばならなかった。傷ついた兵士などの写真はあまりにも衝撃的で、国の親戚たちの苦痛になるだろうと考えられたからである。

統制

この本は当時どれほど報道や写真が制限されていたかを示している。政府や情報管理局や軍部は、出版物すべてを統制していた。真相は、秘密がよく保持されていたのだった。

60 年後の今、残されたさまざまな公文書、コレクションの写真などが出版され、植民地戦争におけるテロや暴力の真の姿を示している。

12 万人ものオランダ兵士たちは帰還後、残酷な現実の話をも聞きたくないことを知った。彼らはメディアで見せられた写真に、話を合わせることをしなかった。その上「東インド」を失ったことに関しては、まだ国民の理解が必要であった。

この本の出版前でさえ、3 人の著者には特に

兵士たちばかりでなく、彼らの子どもたちからも多くの反応があった。この本は、なぜ彼らの父親が戦争について話したくないのかを理解させるであろう。

Koloniale Oorlog:1945-1949

Rene Kok, Erik Somers, Louis Zweers

Carrera 出版 ISBN : 978 90 488 0320 0

故人略伝 フランツ・ドイツ氏

Franz Deutsch(1929-2009)

最初のオーストリア平和博物館の創設者

Peter van den Dungen

エジプトのラス・モハマドという紅海リゾート地において2009年心臓病で亡くなったFranz Deutschに哀悼の気持ちを捧げる。1993年彼はザルツブルグからそう遠くないウルフゼックという小さな商業街に平和博物館を開設し、その後16年間亡くなるまで行動的で人を勇気づける指導者であった。最初から彼は平和博物館の国際ネットワークの熱心なサポーターでもあり、1992年の最初の会議以降いくつかの会議にずっと参加し続けた。参加者は彼が熱意のある平和の教育者であり、多くの人びとに慕われる親切で温かい心の持ち主であったことを記憶するであろう。

彼の生い立ちと教育的哲学を考えると、博物館が以前小学校として使われていた建物の中にあつたことは適切であった。フランツさんは学校の先生であり、若者が社会的な事柄、特に戦争や暴力についてどう考えるべきかを助けることに特に熱心であった。1626年北オーストリアで小作農戦争が終わった。昔の戦場（小作農が残酷に殺され、敗戦した場所）の近くで、彼は「どこで戦争は始まったのか」という重要な質問を来館者が考える機会を与えた。答えは外の戦場ではなく、人間の心の中である。彼はユネスコ憲章の前文の中のその言葉を好んで繰り返していた。「戦争が人びとの心の中で始まっているので、戦争を防ぐことも人の心の中で構築できるのである」と。この考えの目に見える形の表現は、この博物館のロゴになった。この地域の芸術家であり、友人であるHans Schenkがオリーブの葉を運ぶハトがうづくまるメビウスの

輪の中に、人の頭の形が表現されていた。その芸術家の支持でフランツさんはHansのロゴを国際ネットワークのロゴになるように申請した。他のロゴに決定される前には、数年間かかった

ウルフゼックの平和博物館では、平和教育を効果的に推進し、そこは平和を守るための勇気あるイメージ豊かな創造物であった。フランツさんは、平和博物館を平和教育と平和文化を育成するセンターとして機能すべき公的な場所と捉えていた。そこは、民衆、特に若い世代が戦争と暴力の原因の理解を深め、それらを克服する方法や手段についての会話をすることができる場所である。彼はディベートを促すために博物館の中での個々の展示やテーマ性のある事柄を関係づける100以上の平和リーフレットを作り、できるだけ広くいわゆる「移動展示物のひとつ」として配布されるよう望んだ。（もちろん博物館にも常備されている。）

また、彼はこの博物館が平和を愛する人びとの家となり、将来、平和のために大きな力となる世界の人びとを結ぶ地球規模のネットワークとなることを心に描いていた。この観点からの彼の理想と希望は「平和博物館の創設者のためのマニフェスト」に明確に描かれている。そこには博物館へのガイドまたはカタログとして利用できる60ページのドイツ語と英語で美しく豊かに書かれた小冊も含まれている。平和博物館の世界的なネットワークの発展を支援するため、彼はネットワークのための可能なロゴをカタログの中に再度作ろうとしてHans Schenkに依頼した。

フランツさんは「世界平和の夢」は現実となることを深く信じていた。ヘンリー・デイヴィッド・ソローを引用し、われわれは城を築くことができると同時に城の基礎を提供するため一生懸命働くべきであり、それは教育の分野において真っ先になされるべきであると言った。

教育では戦争の原因や動機を明らかにし、戦争にかかるコストや無益を示し、他の選択肢があることを示唆する。彼はPeter Rosegger（ゾットナーの最も熱烈な支持者であるBerthaの一人のオーストリアの詩人）を引用し、「戦争より強いものは何だろうか？それは平和を信じること。われわれは世界平和と持続の可能性と世界にそれを広げることへの信念—それは多くを達成できるであろう—を持たねばならない。人びと

は平和を探せば見つけるだろうと確信している。」と言っている。

彼が「オーストリアで最初の平和博物館の創設者」と主張して誇りに思うのは、当然のことであろう。彼の長年の献身と粘り強さ、そして妻のトゥルディさんの絶え間ない支えがあったからである。博物館創設のために彼は数限りない障害と闘わねばならなかった。彼はしばしば無知と無関心に直面し、博物館がついに建設されたとき「無知と無関心は誤解の海の中の岩のように立ちはだかっている」と言った。

彼は地方の町が爆撃され、家族の多くを失った第二次大戦を十代の若者として経験した。退役後やっと彼は平和教育、特に博物館の建設と運営に献身できたのである。第二次大戦後、特にドイツと日本では平和博物館を創るため、彼と同じような経験、情熱、希望を他の人びとも持ったのである。彼らは創設者の理想と献身的活動(特に経済的に)に多くを負っていたので、博物館の未来は創設者が亡くなると不安定になる。したがって、最初のオーストリア博物館は創設者が亡くなられても存続し、彼が平和に貢献したことを受け継いでいくことを望んでいる。いずれにしろ、われわれは彼の国の小さな絵のような所が、彼の夢を実現するために成功したので、この重要な平和教育者に敬意を表するものである。

ハーグにおける「国際和の日」の大成功

マーチン・ルーサー・キング センターがハーグに設立されるという報告が「国際平和の日」の期間中にイサク・ニュートン・ファリスジュニア(キングセンターの理事であり、マーチン・ルーサー・キングジュニアの従兄)によっておこなわれた。「国際平和の日」には、平和と公正の国際都市ハーグにおいて広く祝賀行事が執りおこなわれた。

1200人以上の子どもたちがマダロダムにおける平和宮殿のレプリカ前で白い風船を飛ばした。続いて子どもたちは町を横切りプレインへ行進した。そして、イサク・ニュートン・ファリスジュニアとバン・アーステン市長による挨拶があった。「ハーグ戦争孤児」と共に、ハーグ市大使のチム・アッカーマン、デニス・ウィー

リング、ソウミヤ・アバルハヤ、アリ・Bさんは子どもたちの努力に感謝した。

ハーグ市の人びとはイサク・ニュートン・ファリスジュニアであるアルダーマン・フリツ・ハフナガル(国際事情)の次のような報告に満足した。「このセンターは平和と公正の国際都市としてのハーグに完全にふさわしいものであり、国際平和の日にこのニュースがもたらされたのはすばらしいことである。」

キングセンターは1968年アメリカにおいてマーチン・ルーサー・キングジュニアの死亡後に彼の業績と思想を記念して設立された。イサクはハーグこそ平和と公正の場所、彼のメッセージをヨーロッパに広める理想的な場所であると強調した。

イメージ戦争の展覧会

- 2009・4・22～10・4 オスナブリック(ドイツ)における戦場からのニュース: 技術・メディア・芸術 -

ウォルズ戦争2000周年記念として、エリック・マリア・レマーク平和センターはオスナブリックの幾つかの他の機構と緊密に協力してこの展覧会を企画した。この計画は平和都市オスナブリックが始めたものだが、古代から現代までの戦争についての報道に新しい視点を与えた。次のような質問に対して答えようとしている。

「技術的な発展は、どのように戦争のイメージを変えたか。なぜ戦争報道は、消費者物資としてこのように成功しているのか。」また信頼できるメディアの報道を、批判的な態度で探そうと試みている。特にこの展覧会では、例えば記憶に深く残るような戦争ジャーナリズムのように、『戦争のイメージ』よりむしろ『イメージの戦争』がいかにも人びとの心に入り込んでいくのかを示している。

さらなる情報は EMRPC:Mark 6 : D-49074 Osnabruck (ドイツ)にあります。

www.remarque-zentrum.de

または www.imagebattles.eu

オバマの平和賞賞金の一部を平和ミュージアムへ:

JAMES・HANNAH (AP)

2009/10 /27

デイトン・オハイオ： 平和の達成に貢献しているまだ駆け出しのミュージアムは、ノーベル平和賞の 1400 万ドルを何に使うかを決定する時に関して希望を抱いている。

デイトン国際平和博物館のボランティアとサポーターは、寄付をすることを望む手紙をオバマ氏に書いている。デイトン市長 Rhine McLin は 市のリーダーたちが大統領に連絡をとっており、ミュージアムの寄付者たちもアピールするように州の事務官に要望していると言っている。

オバマ氏は 12 月に賞金を受け取るためにノールウェイ・オスローへ行き、慈善事業へ献金すると既に述べている。オワイトハウス報道官 Robert Gibbs は、オバマ氏がまだどの慈善事業へ寄付するか決めていないと述べた。

博物館事務官は、この賞金を平和維持活動・小学校と若者の初犯者やリスク前の若者の紛争解決活動に使うだろうと述べている。

シカゴの優秀な生徒が先月暴力死したことにオバマ氏は注目している。大統領は司法長官 Eric Holder と教育秘書 Arne Duncan を市に送り、生徒、両親、管財人に会うようにした。連邦事務官は若者の暴力の国中への広がりを止めることを約束した。

デイトン博物館はデイトンに住み長年平和活動をしているクリスチャン・ダルと夫ラルフ・ダルが、国連を訪問後ニューヨーク市からの帰途、2003 年バス停食堂に立ち寄ったとき生まれた。

クリスチャン・ダルは「突然、デイトンが平和博物館を持つことは楽しいことよね。世界には何千という戦争博物館と記念館はあるけど平和博物館はほとんどないでしょう」と言った。

デイトン博物館は 1877 年建造のイタリア式マンションで 2005 年オープンした。ダル夫妻と他の何人かは彼らのお金を使って開設し、社会変革を促進させる草の根グループが支援する地方組織からの基金 1 万ドルでまかなった。博物館は、いかなる教会・宗教にも関係していない。

この博物館は学校にボランティアを派遣し、生徒たちに非暴力を選択するように言い、夏の平和キャンプのスポンサーをし、平和祭を開催

している。前の理事はパキスタン、インド・イランへ行き、平和グループや学校を訪問している。

クリスチャン・ダルは「今、世界には良いものを見る目を持つ大勢の人びとがおり、われわれもその一翼を担いたいと思っている」と言った。

幾つかの平和組織が今、花開いている。世界の紛争を防ぎ、解決するためのアメリカ国立平和研究所は、最近 25 周年を祝った。それは 3 人の従業員から出発し、今約 250 人に成長した。ワシントンの国立モールにあるリンカーン記念館の近くに、新しい本部が建てられている。報道婦人官の Lauren Sucher は「それはわが国の平和建設のためのシンボルです」と述べた。

和解の精神を重視するニューヨークの Nyack のアメリカ支部の前行政官 Richard Deats は、長年の平和運動について語り、著作もある。彼は「平和博物館は平和のための人間的な願望を物理的に示すものである」と述べている。彼はまた、「平和が学ばれるところは、文化的な名所として大変重要である」とも述べた。

デイトン博物館の壁にはノーベル平和受賞者マハトマ・ガンジー、マザーテレサ、ネルソン・マンデラ、マーチン・ルーサー・キング・ジュニアの肖像が掲げられ、平和に関する本も書かれている。ある部屋は国連のために、他の部屋は学校の教室のようにポスターで飾られている。

ある部屋は第二次大戦の日本のヒロシマ・ナガサキの原爆の写真と生き残った人びとの詩が展示されている。

クリスチャン・ダルは「核とはどんなものかを何も知らない 2 世代があり、彼らを教育せねばならないと思う」と述べた。

ダル夫妻は大人になり、ほとんどすべての人生を平和への情熱をもって活動してきた。

Ralph は歴史的に平和への強い関心をもって Brethren 教会で生まれた。彼は朝鮮戦争の間、思慮深い観察者であって軍隊に入る代わりにバルチモアのslamで 2 年間働いた。

1983 年、夫妻は友情の旅でソビエト連邦の訪問をおこなった。1989 年 2 人のソビエトの農民がオハイオの彼らの農場で働いていた間、共同農場に住んだ。

「われわれは政府が何をしようと思わないので、友情のために互いを知る必要

がある」とクリスチャン・ダルは言った。

何年間もダル夫妻は数えきれない平和ラリーや徹夜の祈りを受け持った。

1995年ライト・パターソン空軍基地の近くで、戦争で荒れたバルカン諸国民のリーダーたちが平和について語ったとき、クリスティンはVedran Smailovic（サラエボのチェロ奏者で爆撃されている通りでチェロを弾いて勇者のシンボルとなった）を讃えて基地の壁の外でチェロを演奏した。

今日、ダル夫妻は75人のボランティア、名誉ある評議員として前国連大使 Richard Holbrooke、俳優のMartin Sheen、歌手のWillie Nelsonと共に博物館を運営している。

夫妻はカラフルに塗られ、内部に陳列台がある平和の車に乗って地域の行事に参加している。そのような車は他にも見られる。地域の郊外で平和のパレードに参加する許可をもらう時など、ダル夫妻は敵意をもった人の接待を受けることもまれにはあるが。

ある男が電話で「どうしたんだ。平和の車め。今、戦争がおこなわれていることを知らないのか？」とどなったとダルは笑いながら言った。

もし、この博物館がオバマの基金を受け取ったら、それは最初の平和賞金となるであろう。2005年Holbrookeはバルカンで戦争を終わらせたWright-Pattersonの承認を得るという彼の功績が認められた後、この博物館へ25000ドルのデイトン平和基金のうち1万ドルを寄付した。(2009年The Associated Pressからのコピー)

国際赤十字社と赤新月社博物館（イスラム社会の赤十字団体）

国際赤十字社と赤新月社博物館の目的は彼らの記憶と伝統を保持することである。その目的のために赤十字社、及びこの運動の発展を示す多くの資料を入手した。これらの資料は戦争捕虜たちから手に入れたもので、ICRCの代理人への感謝もユニークである。

この博物館のコレクションは印象的で、地理的に大変広範囲であり、16000ものポスターがある。

国際赤十字と赤新月社10社の特別な協力を通じて、この博物館はさらに将来伝統となるように現代の人道主義的行動を示すような展示物

と映像のコレクションを増やしている。ほとんど今まで公共の場所で展示されていない物や映像やポスターの精選品が今、下記で見ることができる。

www.micr.org

Tel. +41 22 748 95 11 Fax +41 22 748 95 28

カレンダー： アルバニア・サマー・プログラムの子どもたちが撮った写真

2009年7月パディ・マッケンタガートとスーザン・ジョーンズはどちらも写真に大変興味をもち、B3P サマープログラムのボランティアとして北部アルバニアのThethという辺鄙な村へ行った。そのサマープログラムの理念は若者に英語と環境学を教えることによって持続可能な旅行者の目的地へと村を発展させ、長期間の後にはこの村の未来は彼らのものになるというものであった。この写真を通じた活動の理念は、写真技術を通して学生たちが村のすべてのことを執り行うことを助けることであった。例えば、文化や景色や人びとを大切に、昔の環境や遺産を認識することを助けるという目的である。それは大変特殊だが、それらの世話をする責任をもたせるようにしたのであった。

2週間のコースで5-20歳の60人の学生たちはデジタルカメラをもらい、興味あるものや美しいもの、Theth村のユニークなものは何でも写しても良いと言われた。ほとんどの学生にとってカメラを使うのは初めての経験であったが、すべての学生はこのプロジェクトを受け入れ、すべての期待を越えるすばらしい結果に誇りをもった。

イギリスにもどったパディとスーザンは学生たちがつくった12枚の優れた写真を使ってカレンダーを作った。そしてこの地域のB3Pの仕が長く続き、コソボやモンテネグロにも翌年、その範囲を広げることを願っている。

(アントニア・ヤング博士に感謝を込めて) www.balkanspeacepark.org

アジア太平洋ジャーナル： Japan Focus

アジア太平洋 そして世界を形成しているも

のを深く批評的に分析している。アジア太平洋ジャーナルは地政学・経済学・歴史・社会・文化やアジア太平洋の国際関係を批判的に分析する。

ジャーナルのために用意された記事に加えて、ジャーナルは日本語・中国語・韓国語その他の言語からの翻訳を載せる。仲間が査読し、このよく観察され開かれたジャーナルは、十分指標を示す資料である。そのウェブサイトは 1400 以上の記事を持ち、4000 人の予約購読者が 3～7 つの新しい記事にリンクしている無料週刊ニュースレターを受けとっている。40 万以上の記事が毎月アクセスされ、6 大陸の 180 の国々の 17 万以上の読者が利用している。

これは、戦争と平和・爆撃・核戦争・戦争の残虐性・歴史的記憶、20 世紀における戦争について、日本・韓国・中国・アメリカやその他の国々の記録を批判的に検証し、深い論議を含むすばらしい e ジャーナルとアーカイブである。
<http://www.japanfocus.org/site/view/103>

* 「Mark Selden氏による日本とアメリカの戦争の残虐性、歴史的記憶と和解、第二次大戦から今日まで。」は次のウェブサイトにある。(英文) <http://japanfocus.org/-Mark-Selden/2724>

* 「忘れ去られたホロコースト : Mark Selden によるアメリカの爆撃の残虐性、日本の都市の破壊、第二次大戦からイラク戦争までのアメリカの戦争のやりかた」
<http://japanfocus.org/-Mark-Selden/2414>

興味深いウェブサイト

The Institute for multi-Track Diplomacy in Wahsington, D.C. : www.imtd.org (英文)

EuroClio: <http://www.euroclio.eu/site/> (英文)

出版物

The Sifting Grounds of Conflict and

Peacebuilding: Stories and Lessons by John W. McDonald: Kumarian Pr Inc

展示物貸し出しについて

ノーベル平和賞受賞者ベルタ・フォン・ズットナー女史の生涯と活動

ノーベル平和賞受賞者ベルタ・フォン・ズットナー女史の生涯と活動を 20 枚のパネル (巻物) に表したものがオーストリア大使館にあります。写真とテキスト (ドイツ語および日本語) からなっている。サイズは縦 127 センチ横 91 センチで上下にパイプが入っており、巻き上げればコンパクトに収容できる。

平和関連機関からの要請があれば、オーストリア大使館として無料で貸し出しに応じるものと思われるが、具体的に当文化担当とのやり取りが必要になります。

展示物は軽く小さくなりますので、輸送量は数千円で済むのではないかと思います。

重さ: 約 1.3 kg (全国どこでも 1 万円以下で運べる)

オーストリア大使館文化部

〒106-0046 東京都港区元麻布 1-1-20

連絡先 : 03-3451-8281

おことわり

無署名の記事は、編集者の責任でまとめたものですが、署名記事は執筆者の責任で書かれたもので、必ずしも「平和のための博物館・市民ネットワーク」の事務局や編集者の見解を示すものではありません。